

<日本の真相 7>

<日本の真相 6>をまとめ終わり、その真偽のほどを海部宮司にお伺いしようと思い、2012年4月14日と5月4日にお電話差し上げた。両日とも、女性が応対され、宮司様は忙しいので会えないし、電話にもなかなか出られない、とのことだった。更に、著書をご執筆中、ということなので、忙しさに拍車をかけている様子である。ならば、真相公開もいよいよなのだろう。そこで、また連休明けにお電話差し上げることを告げた。

最新資料は持参する予定だったが、5月の連休中にその概要をしたためた手紙を直筆し、資料と共に送付した。そして、再び5月10日に電話した。この日は午前中に式年遷宮行事のお白石持ち行事の応募があり、幸運にも、内宮にご奉仕することが決まった。この日ならば可能性があるかもしれないと思い、お電話差し上げたのである。最初は若手の神職が出られ、今は手が離せないから20～30分後に電話して欲しい、と言われた。また断られるだろう、と思いつつ、40分後ぐらいに電話すると、宮司様が出られた。結局、1時間ほどの電話対談となり、宮司様は終始、ご機嫌の御様子だった。どうやら、手紙が功を奏したようであり、神宮の御加護もあろう。(手紙には卑弥呼の邪馬台国やトヨの大邪馬台国のことだけではなく、諏訪大社での出会いなどもしたためておいた。)以下、その概要である。

なお、宮司様は一度言われたことを言っていないかの如く、また繰り返されたりする。これは、以前に直接対談した時にもそうだった。あまりにも多くの解らぬ人に対応されているので、無意識のうちにそうされているのだろう。だから、1時間の対談と言えど、実質は30分ほどだろうか。

なお、電話対談のお礼と宮司様との御縁を感謝しに、2012年5月23日に籠神社へお神楽を奉納しに行った。その際、多少の期待を抱いてはいたものの、運良くお会いすることができ、その上、対談することまでできた。その内容も併せて記す。

1：電話対談

(1) アミシャブとの関わり

籠神社を訪れたアミシャブ（イスラエルにある十支族帰還運動組織）は礼儀正しい人たちだったらしい。しかし、御頭祭（おんとうさい）の見解に対しては、疑問を呈された。アミシャブは、過ぎ越しの祭りでの羊の犠牲を強調したらしいが、（神社の）神殿では血は最も大きな穢れなので、彼らと我らの接点は無、とのこと。それは、久保有政氏の一連の著書も同様、とのこと。何とまあ、バツサリと。つまり、ユダヤにこだわり過ぎであり、その根源まで調べないといけない、ということである。

(2) 御頭祭

その御頭祭については<日本の真相 2>で概要を記したが、ここで御頭祭につ

いて詳細に記す。

2012 年 4 月 15 日に、諏訪大社の御頭祭を見学した。諏訪大社は上社（本宮（ほんみや）、前宮（まえみや））と下社（春宮、秋宮）があるが、上社で行われる大祭である。大祭は午前 10 時から本宮で、御頭祭は午後 1 時から前宮で行われる。

①御頭祭

現在の御頭祭は明治 4 年以降の、体裁が変えられたものである。それ以前の御頭祭を記したホームページがあったので紹介する。

(<http://www22.ocn.ne.jp/~kuroneko/onto-sai.htm> 参照。)

なお、同様な内容は、守矢史料館で購入できる「神長官守矢史料館のしおり」にも記載されている。以下、その内容である。

江戸時代の民俗研究家、菅江真澄（伊勢神宮御師の家に生まれ、30 歳からフィールドワークを兼ねて東日本を歩いた人）は「信濃の旅 すわの海」の中で御頭祭を紹介している。（信州大学教育楽部教授滝沢貞夫氏監修の「菅江真澄の信濃の旅 信濃古典読み物叢書 6」、信教出版部発行からの引用。）

“…前宮という所に、十間間口の直会殿（なおらいでん）がある。そこには鹿の頭が 75、真名板の上に並べられていた。その中に、耳の裂けた鹿がある。この鹿は神様が矛で獲ったものだという。

袴（かみしも）に居ずまいを正した男が 2 人、動物の肉を真名板にのせて持って登場する。その足どりや出で立ちなど、古いしきたりがあるのだろう。弓と矢を持ち、鎧を着、剣は根曲と言って、柄の下で曲がったものを差している。直会殿の南の隅には、白鷺、白兎、雉子、山鳥、鯉、鰯、鮎などの肉、三方に入っているのは米 30 斛だ。また菱餅、海老、アラメを串に差したものも目につく。こうして、神に供える大きな魚、小さな魚、大きな獣、鳥の類などいろいろなものが奉られ、数多くの器に組み合わせて供えてあると言える。

一の神主は、事情があってこの祭りに姿を見せなかった。一の神主の山鳩色（黄緑色）の御装束は箱に入れられ、敷皮の上に据えられ、その前にも酒や肴の用意がしてある。次の席の長殿（おさどの）、更にその下の座には、大勢の神官が皆敷皮の上に並んで、この供え物を下ろして食べる。神官はお互いに銚子で御神酒をついで回っている。肴は何度も何度もお代わりをしていた。小さな折櫃に餅、かや、山芋などを入れて、それぞれの前に並べられている。そのうち、長殿が敷皮から立ち上がり、1 本の木の下へ行く。弓矢を持っているので、何かを射ようとするのかどうか、多くの人垣の中でまったく見えなかった。

やがて篠の束の縄をほどき、篠をバラバラにしてその上に敷き、花を供える。長殿はそのままじっとしている。そのとき長さは 5 尺（約 1.5 メートル）余り、幅は 5 寸（約 15 センチ）ほどで、先の尖った柱を押し立てる。これを御杖（おつえ）とも御贅柱（おにえばしら）とも言う。長殿は座っている場所から下りて、柱を良く見て調べ、この木は節があって良くない、などと言って、受け入れようとしない。御神（おんこう、おこう）と言って、8 歳ぐらいの子供が紅の

着物を着て、この御柱にその手を添えさせられ、柱ごと人々が力を合わせて、かの竹の筵の上に押し上げて置いた。

長殿からは、4人目の下位の神官であろうか、山吹色の袂の神官が木棉襦（ゆうだすき）を掛けて待つ。そこへ袴を着た男が、藤刀を小さな錦の袋から取り出し、抜き放って長殿に渡す。長殿がこの刀を受け取り、山吹色の衣を着た神官に渡す。その藤刀を柱の上に置く。また、長い縄を渡す。木棉襦をした例の神官が、刀を柱のてっぺんに当て、刻みつけ、さわらの枝、柳の枝、象（きさ）の小枝などを、例の縄で結い付ける。更に、矢も1本結び付ける。また、3つの枝も結ぶ、これにも矢を1本結び付ける。そして、もう1本の柱も刀で同じように刻みつけ、2箇所を結ぶ。こうして左右2本の柱を飾り立て、縄が残ると、藤刀できっちり切り放す。また柏の枯葉に糝を盛って、折箸で縫い通し、2つとも糝でくっつけて柱に掛ける。そして4つもこの御柱に挿す。

その後、神官たちが家の中ほどに立ち、祝詞を読み上げる頃には、御神楽の音が聞こえ出す。そして、拍手を打つ音が3つ聞こえて後、神楽が止んだ。例の神の子供たちを、桑の木の皮をより合わせた縄で縛り上げる。その縄で縛る時、人々はただ「まず、まず」と声を掛ける。灯し火を灯す。再び祝詞を読み上げた後、大紋を着た男が、子供を追いかけて神前へ出て来る。一方、長殿は藤蔓が茂っている木の下に行き、家を造った時、屋根に刺した小さな刃物を、8本投げられた。

いよいよ祭りは最高潮となる。諏訪の国の司から使者の乗った馬が登場する。その馬の頭めがけて人々は物を投げ掛ける。しかしこの馬は、とても速く走る。その馬を今度は子供たちが大勢で追いかける。その後ろから、御贄柱を肩にかついだ神官が「御宝だ、御宝だ」と言いながら、長い鈴のようなものを5個、錦の袋に入れて、木の枝に掛け、そろりそろりと走り出し、神の前庭を大きく7回回って姿を消す。そして、長殿の前庭で、先に桑の木の皮で縛られていた子供たちが解き放され、祭りは終わった。

一の神主（御祝の司）はこの神様の子孫で、この国の司も同様であり、長殿も守矢の大殿の子孫であるという。”

これは、主がアブラハムの信仰心を試すため、息子のイサクを生贄として奉げるよう命じたが、アブラハムが命じられる通りに行動したので、主の御使いが止めさせたことを再現した神事と思われる。この時、木の茂みに1匹の雄羊が角を捉えられており、それを生贄として奉げたが、75頭供えられる鹿の中には必ず耳の割けたものが1頭はいるという諏訪大社の七不思議はこれに由来する。しかし、これだけでは“75頭”の意味が説明できない。

北イスラエル王国だったサマリアにはゲリジム山という山があり、申命記27章に依れば、シメオン、レビ、ユダ、イサカル、ヨセフ、ベニヤミンが民を祝福するために立った山で、サマリア人がこのゲリジム山に神殿を建てていたことが歴史家ヨセフスによって記録されており、エルサレムの神殿よりはるかに古い。

(http://www.nunochu.com/bible/06_joshua/jos09.html 参照。)

サマリア人は今でも生贄をゲリジム山で屠ったりしており、ユダヤ教徒の祭儀よりも、より聖書に忠実と言える。

(<http://www.ne.jp/asahi/petros/izumi/2011msg/110403.html> 参照。)

一説には、このゲリジム山で子羊の生贄を行う際、75 頭を屠っていたと伝えられている。

(<http://wave.ap.teacup.com/renaissancejapan/1036.html> 参照。)

ヨセフの子がマナセとエフライムであり、エフライムが北イスラエル王国の大王となった。ならば、北イスラエル王国に於けるゲリジム山での祭祀が再現され、そこにアブラハムの信仰心を象徴するイサクの祭りを重ねることにより、自らの信仰心の証を示しているとも言えるだろう。それはすなわち、北イスラエル王国の大王家である海部氏の信仰心に他ならない。なお、“ $75=7+5=12$ ”で12支族も暗示しているのだろうし、柱に人を掛けることは、イナンナとイエスも連想させる。

他には、新約の使徒言行録に、ヨセフがヤコブと75人の親族一同を呼び寄せた場面があり、この数字が唯一該当する。しかし、旧約の出エジプト記では、ヤコブから生まれた者の総数は70人、とあるので、御頭祭が秦氏渡来以前のユダヤ教のものだとすると、ここに数字の矛盾が発生する。

そこで、鹿に着目する。鹿は神の使いとされ、ヨーロッパでは鹿の角はイエスが掛けられた十字架と見なされている。角はラテン語でコルンであり、これは“光”という意味もあるから、鹿の角を、人類の希望の光となったイエスの象徴だと見なすのである。故に、王侯貴族は狩りで鹿を追い詰めることにより、イエスの受難を迫体験すると考え、鹿狩りが盛んに行われた。

“75人の親族”と書かれているのは“使徒”言行録だから、象徴的に“75”を“イエスの使徒”と見なしているわけである。そして、十字架上でイエスは血を流していたから、血が滴る鹿の頭はイエスの象徴と成り得る。

ならば、御頭祭での鹿はユダヤ教由来ではなく、原始キリスト教の秦氏が仕掛けたことが明白である。冬の諏訪湖の御神（おみ）渡りは、上社の建御名方命が下社の八坂刀売命（ヤサカトメノミコト）に会いに行った足跡ともミシャグチ神が通った跡とも言われているが、これもイエスが湖の上を歩いたという新約の記述に基づいて、元々あった上社（本宮・前宮）に対して下社（春宮・秋宮）を創建したと思われ、秦氏の関与である。

また、ヨセフがヤコブと75人の親族一同を呼び寄せたことにされているから、ヨセフに関わることの暗示でもあり、エフライム族の関わりを暗示している。つまり、エフライム族＝海部氏の真相を封印するために、秦氏が施したカッパーラである。物部氏は牛を生贄として神殿に奉げていた。それを秦氏に依って禁じられた。故に、75頭の鹿を奉げる以前は、愛宕の牛松山のように、牛を生贄として燔祭を行っていたと考えられる。

②本宮での神事

本宮の御神事は特に変わったところはなく、神職、氏子総代が集まって粛々と進めて約1時間。

③守矢史料館と北斗神社

史料館は本宮と前宮の間、現在も続く守矢家の敷地内にある。守矢家の祖先は建御名方命が諏訪に来た以前の土着の神、ミシャグチ神と言われ、上社大祝（おおほふり）を補佐し、上社五官の筆頭として代々祈祷と政務事務を掌握してきた家柄で、神長官（じんちょうかん）と言う。守矢早苗氏という女性が78代目当主である。

館内には、かつて供えられていた生贄の剥製など（ウサギの串刺しの剥製、鹿の頭の剥製、鹿の脳みその和えた模型など）が展示されていた。

敷地内にはミシャグチ神を祀る社があり、そこにも四隅に御柱が建てられていた。ミシャグチ＝御イサク地とすれば、やはりイサクに関する神事が行われるのも頷ける。ただし、ミシャグチ神は蛇神とされており、単にイサクのことだけではなく、やはり、シュメールの蛇神が重ねられていると考えなければならない。

しかし、それだけではない。シュメール本土には、ウサギを串刺しにしたり、鹿の脳みそを和えたりする風習は無かった。勿論、ユダヤ教や原始キリスト教にも無い。この地は縄文時代の遺跡が数多く出土していることから、明らかに、狩猟による肉食が盛んだった縄文人の風習だと考えられる。

<神々の真相 1>に記したように、カ・インは南北アメリカ大陸に追放されたが、<日本の真相 4><日本の真相 5>に記したように、縄文人はカ・インの子孫と考えられる。大洪水後、助かったカ・インの子孫は環太平洋地域に広がり、一大文化圏を形成していたならば、これらの地域で同じような風習が見られることは辻褄が合う。

マヤもこの流れを汲むが、神への生贄が後に誤解され、人間の生贄を捧げるようになった。これと似たようなことが日本でも発生し、それがウサギを串刺しにしたり、鹿の脳みそを和えたりする風習になったと考えられる。（人身供犠まで堕ちなくて良かったが、神話には、例えば乙女を食べていた八岐大蛇の話などがあることからすると、どこかで行われていた可能性は否定できない。）

つまり、御頭祭はカ・インの子孫である縄文人の神祭りにシュメール、ユダヤ教、原始キリスト教が重ねられた、極めて複雑怪奇な御神事と言える。

史料館から帰る時、守矢家の軒先に十字架の御紋を発見した。正確には“丸に十”で、島津の家紋と同じだが、根源はアヌと主エンキの象徴である。

また、本宮から来る途中に北斗神社があり、その由緒書きには“天御中主（北極星）”とあった。北極星を古代支那では“太一”と言い、天に於ける不動の星ということで、後に秦氏が神宮の象徴文字として採用した。ならば、この北極星というのは、本来の北極星ではなく“太一”のことで、それは天照大神に他ならない。すると、天御中主神＝天照大神になって籠神社の極秘伝と同じであり、こんな所で籠神社の極秘伝が裏付けられるとは、思ってもみなかった。

本宮と神輿



北斗神社由緒書き



守矢史料館石碑



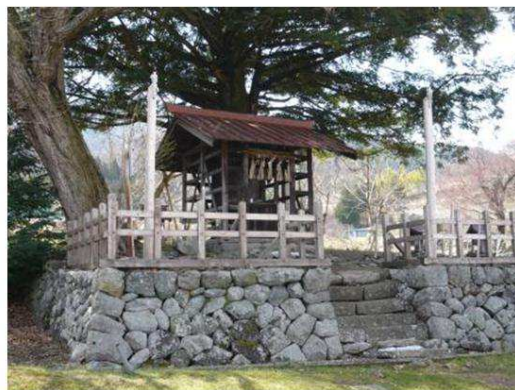
守矢家表札



生贄のウサギ模型



ミシャグチ神



守矢史料館



守矢家軒先の十字架



守矢家軒先の十字架拡大



④前宮での神事

午後は 13:00 から本宮で御（ぎよ、御神体）を宮司が神輿（しんよ、おみこしのこと）に遷すところから始まった。たまたま横の回廊に居たため、神輿の横から宮司が御を収める場面を見ることができた。

そこから前宮まで約 1.5 キロを肅々と参進する。前宮の十間廊（じゅっけんろう）が御頭祭の祭場となる。そこには既に剥製の鹿の頭が 3 頭供えられていた。なるべく中が見える位置に立って様子を伺った。祭壇に神輿が運び込まれ、その前に案が設置され、その上に神饌が供えられた。新たに鹿の頭の剥製が 3 頭分、神輿に向かって供えられた。そして、御贄柱がその前に供えられた。この柱はかつて、御神とされた子供が縛り付けられた柱である。そして、柱の前で祝詞が奏上され、玉串が奉奠された後、撤饌されて終了。

このように、現在の神事では、前述のような興味深い所作は行われない。

御頭祭-1



御頭祭-2(神輿安置)



御頭祭-3(御贄柱)



御頭祭-4(玉串奉奠)



(3) イナンナ

手紙には、イナンナがアメノウズメであることを記しておいた。これは、一昨年の対談でもお話したことである。その項目が目に残ったらしいが、一昨年の対談はお忘れなのだろうか。

「岡野玲子さんという方が、イナンナという漫画を描いているのですね」

「存じております。一昨年の対談の際に、お聴きしました」

「岡野さんは今年の葵祭に来て、直会の時に私の隣に座って 1 時間か 2 時間、お話しましたよ」

「左様でございますか」

「あの漫画は陰陽師とは異なって、あまり売れなかったようです。残念ですね」

「そうですね。他の漫画とは、体裁がかなり異なりますし…」

「ベリーダンスの大元はイナンナの踊りと考えられるが、あなたはどう思いま

すか？」

「イナンナが大神アヌの前で歌い踊ったことが原型だと考えます」

「(頷かれたような感じ)」

「聖書は大切ですが、やはり根本のシュメールが無ければ」

「新約よりも、旧約ですね…」

そして、やや間を置かれて言われた。

「最高神はイナンナである！」

これには、思わずのけぞってしまったのと同時に、やはりな、という感覚もあった。そして、イナンナが歪み、「神々」の闘争の原因となったマルドゥクではなくて良かった、と安堵した。ならば、海部氏はフェニキアととても深い関係にある、ということ。イナンナが最高神なのはペルシャ、インド、アッカド、そしてフェニキアである。一時期は、シュメールでの最高神的振る舞いもある。インドとペルシャは、イナンナはないがしろにしており、アッカドはエンリルの息子アダド(イシュクル)が主体で、後にイナンナとウツが合わさったから、これらの地域の可能性は低いだろう。

ならば、地名自体、不死鳥フェニックスに由来し、不老不死の根源はイナンナだから、イナンナが最高神として深く関わっているのはフェニキアと言える。フェニキアならば、“海人、海神”とも関わりが深い。

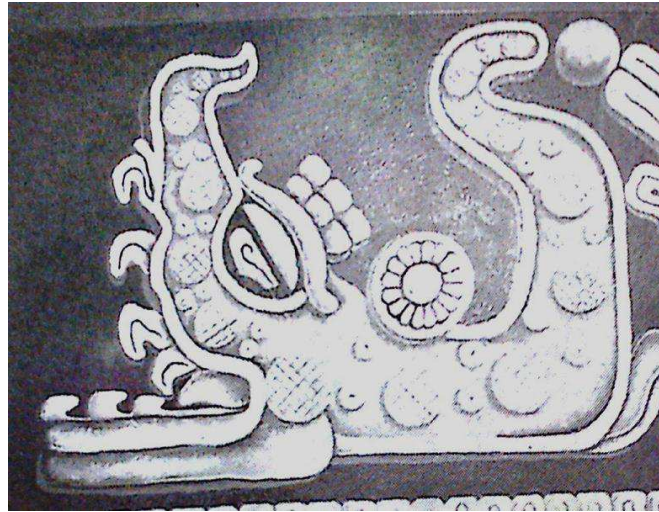
「イナンナは女神(によしん)で、天照大神も女神であり、何か深い関係が感じられますね…」

宮司様は大概、このように発言されるのである。前回の対談の際には、メソポタミアの粘土板写真を持って来られ、そこにはイナンナの忠実な部下ナラム・シン(アッカド人であり、フェニキア人ではない)と、イナンナの印である十六花卉八重菊紋が描かれていた。そして、

「こういうところにも、菊の御紋があるのですね」

と言われていたことも合わせると、やはり最高神はイナンナなのだな、と納得できる。しかし、菊の御紋は、マヤのククルカン=ケツァルコアトル(ニンギシュジツダ)像にも描かれていることを忘れてはならないし(次ページのククルカン像は高坂和導著、「竹内文書」超古代アメリカに行く(徳間書店)から引用)、シュメールの本来の最高神はアヌで、実質の最高神は地球の主エンキである。イナンナはアヌの愛人となり、アヌはめったに降臨してこなかったから、最高神はイナンナ、というのも頷ける。

菊の御紋は“菊”と言ってはいるものの、<神々の真相 2>に記したように、本来はロゼッタであり、実はナツメヤシの花である。(小林登志子著、シュメール—人類最古の文明(中公新書)参照。)ナツメヤシの学名はフェニックスであり、フェニックスはフェニキア(とエジプト)の不死鳥で、イナンナが原型である。



古事記では、イザナギの鼻からはスサノオ、左目からは天照大神、右目からは月読命が生まれたとされている。イザナギの顔がこちらを向いていれば、最も重要な中心の柱はスサノオ＝イナナ、向かって右が天照大神＝太陽神＝ウツ、左が月の動きを解析したエンキとなる。

・峻厳の柱：エンキ、均衡の柱：イナナ、慈悲の柱：ウツ。

エンキは海神だから籠神社極秘伝の海神ヤー、イナナは女神で「生命の水」で蘇ったから陰であり、真名井の水に関係する豊受大神、ウツは男神で太陽神だから陽であり、本来の天照大神である天照国照尊となる。この三柱が日本神界の根源を成しているわけである。

古事記的には「生命の樹」との対応はこのようになるが、通常、均衡の柱は“隠れた大神”となる場合が多く、慈悲の柱が普段最も関わりの深い神となるから、そのような観点からは次のようになる。

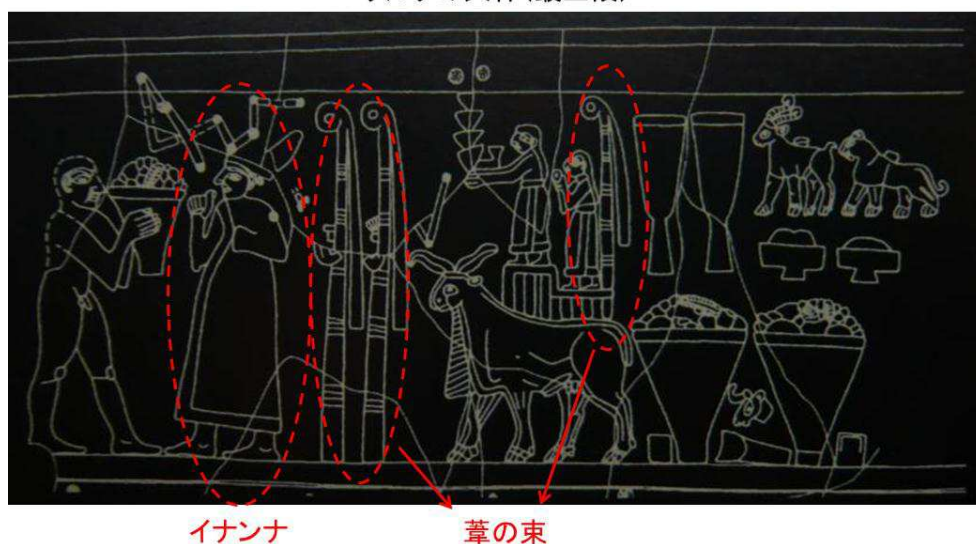
・峻厳の柱：ウツ、均衡の柱：エンキ、慈悲の柱：イナナ。

ウツは“正義のシャマシュ”と言われ、ハンムラビに法典を授けたともされる。“正義”“法典”ならば、峻厳の柱に相応しい。また、ウツの王位継承数字は 20 である。神器の法典たる十戒石板の入った契約の箱は最長でも 20 年しか同じ場所に留まらず、法典故にウツに関わりがあるはずで、実際、その年数はウツを暗示している。その契約の箱は、現在、内宮地下殿にあるとされているが、式年遷宮はウツを暗示する 20 年毎に行われる。つまり、内宮は女神とされている太陽神・天照大神を祀るが、本来暗示しているのは太陽神ウツ＝天照国照尊である。

その内宮と陰陽の対を成す外宮は豊受大神だが、水神で、「生命の水」で蘇ったとされるイナナに他ならない。そして、豊受大神は衣食住を司るとされて

いるが、イナンナは豊穡の女神で矛盾しない。更に、エンキも水に関わり、イナンナに「生命の水」を与えたのはエンキだから、豊受大神にはエンキも含まれている。イナンナが原型のスサノオは、海原を治めるように言われた。イナンナに海神エンキが重ねられているのなら、スサノオが海神なのも矛盾しない。そのスサノオに由来するのは“蘇民将来”が関わる茅の輪くぐりだが、イナンナの他のシンボルには“葦の束”があり、茅は葦の一種だから、これもイナンナが根源となっているわけで、矛盾しない。以下に示す図は、“葦の束”が描かれている“ウルクの大杯”の最上段部だが（前川和也編、図説メソポタミア文明（河出書房新社））、イナンナと共に、彼女の象徴である“葦の束”が描かれている。“葦の束”は“吹き流し”とも“旗（ポール）”とも言われるが、鯉のぼりに吹き流しがあるのは、イナンナが原型だったのである。

ウルクの大杯(最上段)



このように、「生命の樹」に於ける「神々」の位置が場合によって異なることは、＜神々の真相3＞に記したように、イナンナが主神のインダス文明でも見られることである。

以前、海部宮司は、ヤーは陰にも陽にも成り得る、と言われたが、＜日本の真相6＞に記したように、ヤーはエンキやニンギシュジッタ、ウツ、イナンナなどの「神々」が習合した神で、天照国照尊とされた。これは「生命の樹」に於いて、三柱の「神々」で一柱の「神（あるいは神界）」を構成する、という考え方と矛盾しない。ここではニンギシュジッタが外されているが、＜日本の真相5＞に記したように、天照国照尊は猿田彦と同義であり、猿田彦にはニンギシュジッタ的性質があった。つまり、天照国照尊＝猿田彦とすることによって、このようなカッパーラ（日本神界の主神はエンキ、イナンナ、ウツの三柱であること）を仕掛けたのがニンギシュジッタであることを暗示しているのである。“ニンギシュジッタ”という名前は、“真理の樹の主人”という意味だから（前

述の小林登志子の著書参照)、あらゆるカッパーラはニンギシュジッダに帰結するのは当然ではあるが、とりわけ菊の御紋がマヤのケツアルコアトル(ニンギシュジッダ)像にも描かれていることは、極めて暗示的である。

このように、三柱の「神々」で一柱の「神」を構成しているからこそ、後に秦氏が天神と地祇に分祀することが可能だったのである。天照大神はウツの太陽神としての性質、豊受大神はイナンナの「生命の水」の水神としての性質とエンキの水神としての性質として。

そうすると、以前に海部宮司が「上賀茂は同族である」と言われたことも理解できる。上賀茂の祭神は別雷命で雷神だが、シュメールでの雷神はアダド＝イシュクルである。イシュクルはイナンナ、ウツの叔父(王位継承数字は10で、イナンナの15やウツの20よりは小さく、叔父にも関わらず継承順位は下)だが、<神々の真相1>に記したように、3人は兄弟のように仲が良かった。故に、上賀茂はイシュクルを暗示しているのである。

ここに秦氏のカッパーラを重ねると、中心は元々の最高神を祀っていた海部氏・尾張氏、向かって右は以後、日本の中心となった秦氏、左は容易に秦氏に国譲りした葛城氏となる。葛城＝桂木で、桂は月に生えたとされる想像上の木だから、桂木＝葛城は月に関連し、前述のように、月に関わるエンキは峻巖の柱にも相当した。

・峻巖の柱：葛城氏、均衡の柱：海部氏・尾張氏、慈悲の柱：秦氏。

よって、日本の神社はシュメールの「神々」を祀る神殿に他ならない。そこに後から、ユダヤ教と原始キリスト教の象徴が重ねられた。ユダヤ教的と言われてはいるものの、それは後から重ねたものだから、海部宮司は御頭祭と神社神殿の関係を否定されたのである。その籠神社から直接勧請された外宮には、<神々の真相2>に記したように、明らかにシュメールの「神々」が祀られていることを暗示し、謎を解く鍵とされている。

・峻巖の柱：風宮＝エンリル、均衡の柱：多賀宮＝アヌ、慈悲の柱：土宮＝エンキ。

ならば、神社の前に安置されている狛犬にも、シュメール的解釈が可能である。向かって右は獅子でユダ族の、左は狛犬＝一角獣でエフライム族のシンボルで、元はエジプトのスフィンクスだった。

シュメール的に考察すれば、獅子はイナンナと共に描かれているのでイナンナの象徴、一角獣は1つの角があるが、角はラテン語でコルンであり、“光”という意味もあるから、“唯一の光”ということで太陽神ウツの象徴となる。

獅子像は口を開け、“あ＝最初”を暗示するが、日本に於ける最高神がイナンナならば、それが最初の降臨と見なすことができる。“あ”は開いた形で陽、イナンナは女神で「生命の水」に関係するから陰で、両方で陰陽を成す。

狛犬像は口を閉じ、“ん＝最後”を暗示するので、“その時”に降臨するのは

太陽神ウツという解釈が可能である。“ん”は閉じた形で陰、ウツは男神で太陽の象徴だから陽で、両者で陰陽を成す。獅子像－狛犬像、イナナ－ウツでも、それぞれ陰陽を成す関係になっている。

そして、＜神々の真相 5＞で考察したように、イエスの父はエンキ、母はウツが地球人の女性に産ませた子マリアであるならば、太陽神であるウツを天照大神と見なせばイエスは“天孫”となり、“その時”にイエスもウツと共に降臨して、天孫降臨が再現されるわけである。それが内宮宇治橋の鳥居の間から昇る日の出と共に起きるならば、宇治＝ウジ＝ウヅ＝ウツだから、まさに“太陽神ウツの橋”はその場に最も相応しい。

その鳥居だが、＜日本の真相＞では“YHWH”のヘブライ語を縦に積んだ形でアダム・カドモンであり、「生命の樹」の四位階を表し、神の戦車メルカバーでもあり、鳥居は主の炎でもあった。そして、八咫鳥が鳥居を通る人を見張っているから、“鳥が居る”ということで“鳥居”である。しかし、鳥居の解釈もシュメール的解釈が可能である。

日本に於ける鳥居の原型は、大神神社にある 2 本の柱に縄を掛けたもので、その原型はエルサレムの神殿に立てられた 2 つの青銅の柱、ボアズとヤキンである。更にこの原型は、エジプトにあるオベリスクである。オベリスクには 1 本の物もあれば 2 本の物もある。1 本の原型はマルドゥクがヘリオポリスで祀り始めたベンベンだが、その先端には不死鳥フェニックスが留まるとされている。フェニックスの原型はイナナであり、石か木かの違いはあるが、柱の原型もイナナである。ならば、オベリスクの原型はイナナと言える。イナナが主神だったフェニキアには、＜日本の真相 6＞に記したように、神殿の中心に据えられた神の存在と座のシンボル、一本石柱ベテュルがあり、アシェラと呼ばれる奉納用の小さな木製の柱が供えられ、同じく主神だったインダスにはリングがあることから、柱の原型はイナナである。このような柱は、「神」が降臨する依り代である。

特に古い時代（縄文時代など）の柱は木製が多く、彫刻などの飾りが付けられているものがあり、その典型がインディアン・トーテムポールである。（以下、大和岩雄著、神々の考古学（大和書房）参照。）トーテムポールは内と外との結界であり、故に神域や集落の境界に立てられている。そのトーテムポールの上には大概、鳥（サンダーバードや鷲など）が一番上に乗っているが、これは鳥が天と地を結ぶものであり、鳥を天（神）からの使者と見なせば、神域と俗域との結界となるわけである。そして、元がオベリスクで、不死鳥フェニックスが留まるならば、鳥居の“鳥”はイナナを暗示するわけである。諏訪大社でも四隅の御柱の内側には神殿があるから、御柱の起源は縄文まで遡り、御柱祭はイナナとドゥムジの聖婚の象徴だから、辻褄が合う。

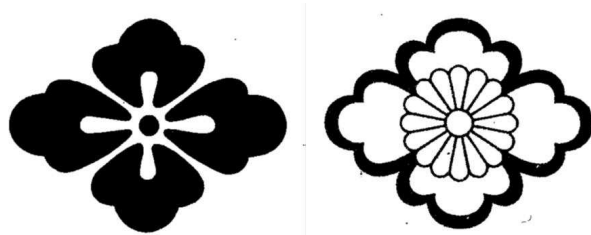
1 本でこれだけの意味があるから、2 本になると更に意味が付加される。オベリスクは 1 本の物が多いが、アメン・ラー神殿などには 2 本のオベリスクがあり、冬至・夏至の朝日・夕日が差し込む“太陽の門”である。すなわち、太陽神を祀る神域の結界である。そこに、前述のようにイナナが関わるのである。

日本の神社の総氏神は神宮であり、内宮では最高神で太陽神・天照大神を祀

る。そして、本来の最高神はイナンナ＝豊受大神であり、柱の原型である。故に、鳥居は最高神イナンナを祀る神域の結界である。そこに、秦氏が“YHWH”のカッパーラを重ねたわけである。

さて、前述のように主要な「神々」は三柱だが、ある意味、ニンギシュジッダを加えた四柱で、“神の戦車メルカバー”と見なすことも可能である。スフィンクスは人の顔、獅子の胴、牛の尾、鷲の翼でメルカバーであり、元々はピラミッドを設計・建造したニンギシュジッダの顔だったから、ニンギシュジッダを加えてメルカバーとすることは矛盾しない。更にイエスを加えた五柱で考えると、そのメルカバーが十字＝イエスを囲んでいるのが、神宮の御紋である。この十字（正確には十字と丸）は菊の御紋でも置き換えられ、それはイエスの原型となったイナンナの印である。中心部がそのような印ということは、イナンナが最高神だということを暗示している。

これだと、イナンナがメルカバーでもあり中心でもある、ということになるので、より良い解釈としては、海部氏と同族の上賀茂に充てられた雷神のイシュクルを加えることである。すなわち、エンキ、ウツ、イシュクル、ニンギシュジッダでメルカバーを構成し、中心がイナンナということである。これが、中心が菊の御紋で表された神宮の御紋である。



イナンナは大神アヌの愛人となり、ウヌグ・キ（ウルク）のアヌから贈られた家（神殿）に住んだ。アヌはめったに降臨しなかったから、これほどアヌに愛されたイナンナは、アヌの代わりと見なすこともできる。すなわち、イナンナには元々最高神的性質がある。そして、アヌ＝アン＝あん＝阿吽＝アーメンで“最初で最後”という意味で、イナンナ（とドゥムジ）が原型となっているイエスはイナンナに重ねることができるので、それを十字で表現したのが一般的な神宮の御紋である。

元々、十字はニビルの象徴であると同時にアヌの象徴でもあるから、中心の十字は大神アヌとその代わりであるイナンナ、そして、イナンナが原型となっているイエスの象徴がまとめて重ねられているわけである。また、イナンナは地球上で最初に生まれた「神」で、イエスが“その時”に降臨する「神」の血を引く者ならば、この関係も“最初で最後＝阿吽”となる。

(4) 日本の古代

最新資料＜日本の真相 6＞が奈良盆地に展開する神社・古墳群の内容であることを受けて。

「奈良へは何回行かれたのですか？」

「今回は初めてです」

「1回だけで、解るのですか？」

「事前にいろいろ下調べをしまして…」

「しかし、神社の伝承なども変えられたり、無くなったりして、とても大変でしょう？」

「熱田神宮の研究員の方などにも聴いてみましたが、記紀や新選姓氏録などの一般的な資料しか当たれない、と言われました。ですから、こうやって、宮司様にお訊ねするしかありません」

「(笑いながら) そうでしょうね…。しかし、我々も結構大変なのですよ。何か、研究資料は表に出ていませんか？」

「いろいろ調べてはみたのですが、出ておりませんね…」

「(シュメールについて詳しく調べた大山祇神社の) 三島敦雄さんの『天孫人種六千年史の研究』は手に入れましたか？」

「探しては見たのですが、なかなか…」

「…日本の古代は、本当に大変です。三重にも四重にも、いろいろなことが重ねられていますよ。あなた、大変なことに手を出されましたね！」

「前回の宮司様との対談から、ここまでやらざるを得ませんでした。だからこそ、こうやって宮司様にお聴きするしかございません」

このままでは、邪馬台国の真相や海部氏がエフライム族なのでは？などとお訊ねしても、答えは得られないと感じたので、別の問い方をした。

「そこで、わたくしの資料なのですが、大筋に於いて、如何なのでしょうか？」

「…そうですね…全部は読んでいないので何とも言えませんが、あなたの見解はこれまでの他の人のものとは違って、とても広く、理解が難しいですね…。何か、これだ、というような物証が無ければ、出版しても、読者はなかなか納得しないと思いますよ…」

「しかし、そのような物証は、ほとんど表には出ていません」

「そうなんですね…。しかし、何か無いと弱いと言うか…。まあ、今までには無い観点なので、面白く読んでもらえるかも知れませんが、やはり、弱いですね…」

このように言われても、物証が無いのだから、シュメールを基本として、何かあればそこに戻り、ああだこうだとカッパウラで推定しては矛盾を見つけ、ということを繰り返しているわけで、言わば、辻褄合わせになってしまっているのは否定できないし、物証が無い以上、このような帰納的手法でしか検討できない。何か、特別な物でも見せてもらわない限り。

しかし、解釈によっては、ここで否定はされなかった。また、宮司様はこれ

までの資料を詳しく読まれているわけではないので、このような言い方をされるのは、致し方ない。ならば、物的証拠と合わせれば、これで良い、と見なしで良いのだろうか？もっと調べたいところだが、何分、資料が無い。

(5) 小林隆利様

昨年の電話でのお話にもあったように、また小林様を紹介された。正真正銘の明治天皇の孫で、籠神社にも 3 回ほど来られたという。その筋の方らしく、字も達筆で、他の人たちには無いものが感じられたという。

中丸薫の画策によって、不本意にも対談させられたらしいが、氏の主張をかなり強調されていた。それは<日本の真相 5>に記したように、南ユダ王国の一部とレビ族の一団がソロモン・フェニキア船団によって大挙渡来した、ということであろう。イナンナが最高神だったフェニキアと合わせれば、これは矛盾しない。しかし、海部氏がユダ族やレビ族ならば、以下のような矛盾がある。

- ・草薙神剣ことアロンの杖はエフライム族の大王が持っていたが、それが海部氏と同族の尾張氏に預けられていること。
- ・フェニキアに接しているのは北イスラエル王国で、両者は婚姻関係などを結んでいた。故に、南ユダ王国よりも、北イスラエルの方がフェニキアとの結び付きは強い。
- ・南ユダは、原始キリスト教徒＝秦氏である。(八咫鳥が認めた飛鳥氏の説。)

よって、やはり海部氏はフェニキアの大船団と共に渡来したエフライム族の大王家だと考えられる。なお、レビ族が北イスラエルのレビ族ならば、<日本の真相 5>に記したように、天香語山命が北イスラエル王国（エフライム王国）の中の祭司レビと推察されるので、神器であるアロンの杖を海部氏・尾張氏が持っていたとしても矛盾は無いが、南ユダ王国のレビ族ならば、矛盾する。また、フェニキアの大王家がエフライム族と婚姻関係を結び、その印としてアロンの杖を授けられていたとしたら、フェニキアの大王家という仮説は成り立つ。

海部宮司は、小林様に手紙を書いてみては？と言われた。その際、私からの紹介だと言っても良い、と。一度、この方にコンタクトする必要があるだろう。海部宮司は、最後にこう言われた。

「もう、地球は壊れてしまいそうだ」

2：直接対談

前述のように、電話対談のお礼と宮司様との御縁を感謝しに、2012 年 5 月 23 日に籠神社へお神楽を奉納しに行った。天橋立駅に昼前に到着し、まだ観ていなかった“昇り龍”の橋立を眺め、本殿及び摂社と奥宮を参拝した後、1 時過ぎにこのような旨でお神楽を申し込むと、正式参拝 (¥1 万～) という扱いだった。

1:30 から団体の御祈祷予約が入っているということで、時間まで社務所で待

つこととなった。先に正式参拝すれば良かったな、と思いつつ、授与所で購入した伴とし子氏の著書をめくっていたが、しばらくすると、受付の女性が伝えられたのであろう、宮司様が出て来られた！団体の御祈祷予約が無ければ、このようにお目にかかることはできなかったかもしれない。（直接お会いして確かめても良いということなのだ、と勝手に解釈した。）こちらとしては面会の予約もしていないので、大変恐縮だったが、正式参拝までの時間、ちょっとした世間話をした。そして、正式参拝後、予想外の 1 時間半ほどにも及ぶ対談となった。以下、その概要である。

(1) 小林隆利様

電話対談で、正真正銘の明治天皇の孫であらせられる小林様に手紙を書くと良い、と言われたものの、その後の調べで、かつての付き人ですら、小林様にまったく連絡が取れなくなっている状況を説明した。すると、宮司様はかなり驚かれたご様子だった。

小林様が来社された時に書かれた参拝者記録を持って来られ、直筆の書を見したが（平成 10 年だった）、単に書道的に立派ということだけではなく、やはり一般人とは次元が異なる達筆さであり、そういう関係の方なのだ、というものであった。しかも、牧師という職業なのだから、尚更、驚きである。

中丸薫との対談は不本意なものであり、中丸のために担ぎ出されたようなものの、と宮司様は言われた。そのため、どこから圧力が掛かり、身を隠されたのかもしれない、しかし、そのような御身分故、殺されたりすることは無いだろう、とのこと。それにしても、宮司様の心配のなされようは、普通ではなかった。小林様の不明は、八咫鳥以外の勢力（緑龍会など）の可能性もある。

何回も繰り返し、小林様のことを言われたことからすると、ユダヤの三種の神器があることは間違いない。

なお、裏組織に関して、歴代首相の指南役だったが詳細は謎とされている四元義隆氏について聞いてみたが、御存知無かった。

(2) アミシャブ

アミシャブのアビハイル氏は息子と共に来たが、通訳の久保有政氏を含めて礼儀正しい人たちだった、とのこと。彼らには「聖書と日本フォーラム」のメンバーが寄り添い、各地でフォーラムが催された。籠神社の地元の宮津市でも開催されたが、宮司様は一切出席されなかったとのこと。言葉尻を捉えられ、都合の良いように解釈されては、宮司様の立場からしても、後から大変なことになるから当然である。（この来日した年（2010 年）には、彼らの来日に先駆けて小生が海部宮司と対談しており、そのような会の参加は見合わせた方がよろしいかと、と述べたのだが、まさかそれが功を奏したわけでもなかろう。）

その「聖書と日本フォーラム」のメンバーと諏訪大社の御頭祭で知り合ったことを述べると、

「それは大変奇遇なことですね、普通はあり得ませんよ。どこで会われたのですか？」

「本宮と前宮の間にある守矢氏の史料館の中で、女性が 75 頭の鹿について質問されていたので、私がこっそり、聖書、と呟いたのがきっかけでした」

「ああ、守矢の史料館ですか。それは何かの御縁かもしれませんね。しかし、神殿に血を奉げることは、神道ではあり得ないんです。彼らは、過ぎ越しの祭りで羊を 1 頭奉げると言っていました、それでも血の穢れは駄目なんですね。その点が、彼らと我々の大きな違いですね」

と言われた。1：(2)に記したように、御頭祭は“75”という数字や“鹿”が暗示することから、御頭祭はユダヤ教由来ではなく、原始キリスト教の秦氏が仕掛けたことが明白であり、サマリアのゲリジム山が関わっていることから、ヨセフに関わることの暗示であり、エフライム族の関わりを暗示していた。

サマリアはエフライム族がいたところで、海部氏がフェニキアと交流の深かったエフライム族であり、同族の安曇氏が諏訪を切り開いていたとしたら、すべて辻褃が合う。ゼカリヤ・シッチン氏に依れば（「神々との遭遇 上・下（徳間書店）」参照）、BC880 年の北イスラエル 6 代目の王オムリにより新しい首都が建設され、ショムロン（サマリア）と名付けられたが、これは“小さなシュメール”を意味する。よって、エフライム族だからと言って、シュメールとの関わりが無い、あるいは少ないわけではなく、サマリア＝“小さなシュメール”の大王家だから大変深い関係なのである。

何よりも、1：(3)に記したように、日本の神社はシュメールの「神々」を祀る神殿に他ならないから、後のユダヤ教や原始キリスト教の神殿ではない。

(3) 本来の神宮

諏訪大社で出会ったメンバーを、6 月、伊雑宮のお田植え祭りにお連れすることを述べた。

「本来の神宮は、伊雑宮なのではないでしょうか？」

「(頷かれた御様子)」

「あそこの向かいには神武参剣道場があり、道場の正面には六芒星が刻まれた大きな石灯籠がありました」

「私は行ったことがありますし、あそこの人も、こちらに来たことがありますよ。戦時中、そこの当主が真剣を振って、昭和天皇に降りかかる災難を払っていたとのことですよ」

「左様でございますか…」

「あそこの逸話では真名鶴が重要ですね。これは、こちらの氏子の中でも、わずかな者たちにだけしか言っていないんですが、今は言えないですね」

「真名鶴の“真名”は、こちらの真名井の“真名”なのではないでしょうか？」

「…鶴は最も太陽に近いところを飛ぶ鳥である。その真名鶴は、たった 1 本の稲穂を咥えている」

「“真名”は真名井神社で豊受大神を象徴し、豊受大神は豊穰の神ですから、稲

穂はぴったりです。ならば、鶴は太陽神で、天照国照尊を象徴しますね」
「伊雑宮のお田植え祭りで奉じられる、あの竹…（小生が、「ゴンバウチワ」）そのゴンバウチワはとても重要である」
「ということは、イエスだけではないですよ（イナンナであることは、敢えて言わない）」
「イエスだけでは、あの祭りの本当の意味は解らない」
「元々神宮の神官だった度会氏は、海部氏と同族でしょう？」
「後に、荒木田氏によって徹底的に封印された」
「しかし、現在でも、式年遷宮の重要な神事などで登場する物忌童女などは、度会氏の血統なのでは？」
「そうであったとしても、絶対に言わないでしょう。…しかし倭姫は、海部氏の血統ですよ」

天照国照尊が太陽神で陽、豊受大神が水神で陰ならば、天照国照尊は太陽神ウツ、豊受大神は豊穰の女神であるイナンナである。真名鶴が稲穂を咥えている様子は、両神の合一、陰陽の合一を象徴する。

あるいは、真名鶴を“太陽の鳥”と見なすなら、日＝火の鳥フェニックスの暗示で、イナンナである。そのイナンナは豊穰の女神だから、稲穂を咥えていることは相応しい。

そして、お田植え祭りは漁師の町の人たちが行う。漁師は海人で、海を渡って来た民だから、海の民フェニキア人と深い関係である。そのフェニキアの主神はイナンナであり、イナンナが掛けられた木こそ「生命の樹」の根源で、それがゴンバウチワとして象徴されている。イエスだけならば、物部氏のトップである海部氏が、ゴンバウチワの重要性を説かれるわけは無い。イナンナは豊穰の女神だからこそ、「お田植え」は相応しい。残念ながらイエスには、豊穰の神、という象徴は無い。

なお、海部氏系図では、倭姫は大倭姫命（おそらく 10 世孫）に相当する。

(4) 三種の神器

三種の神器は飛鳥氏がユダヤの三種の神器と決めつけたが、それだけではない、と言われた。これには一瞬、戸惑ってしまい、ユダヤの三種の神器ではないのですか？などと聞いてしまった。

「剣となる鉄は、かつて半島での製造が盛んだった」

と言われたので、だとしたら、鉄を制する者が国を制したから、剣もアロンの杖だけではなく、本物の剣もあるのでは？と思われた。

「製鉄は半島では新羅が中心で、新羅は海部氏が建国した国です。新羅に関わりの深い瓠公と脱解王は海部氏の出自ですよ？」

「太古は船に大きな瓢箪（状のもの）を付け、航海したという」

「小林様のご発言の重要性は、フェニキアの船団にあると考えますが…」

「…何らかの船団ではあろう」

「それで、半島から戻って来て大王となった可能性もあります。それが、延鳥郎（ヨンオラン）と細鳥女（セオニョ）の話になり、邪馬台国建国に大きく関わっていると思われませんが…」

「今の段階では言えない」

「この前、お電話でおっしゃった、イナンナが最高神ということであれば、海部氏とフェニキアはとても関係が深いはずですが…」

「(また、そらされ) いろいろ調べると、最高神的ということである」

「天照国照尊も最高神ならば、双子の太陽神ウツも合わされていますね？」

「太陽神ウツも重要である」

“最高神的”ということであれば、1: (3)に記した「生命の樹」に於ける「神々」の位置の入れ替えは可能であり、日本神界の真相は前述の考察のように、次の通りである。

・峻巖の柱：ウツ、均衡の柱：エンキ、慈悲の柱：イナンナ。

常に関わる慈悲の柱のイナンナは“最高神的”であり、本来の最高神は地球の主エンキ＝ヤーである。そして、ウツは“正義のシャマシュ”の通り、峻巖の柱で、神器の法典たる十戒石板の入った契約の箱が安置されている内宮の太陽神・天照大神に相応しい。次に、太陽神ということで、鏡の話となった。

「宗像から見つかった鏡は航海安全のための祈りの道具で、人間の身代わりとされた。魏志倭人伝にも記載されているが、船に乗船した祈り人は、航海がうまくいけば歓待されたが、そうでない場合、海に投げ込まれた」

「日本武尊の妻の話（*）もそこから来ているのではないのでしょうか？」

「その可能性はある」

「宗像も海部氏一族なのですか？」

「広く言えば一族だが…」

「海神と海人の違いでしょうか？」

「鏡とて、飛鳥氏の言うようなものではない」

「本来の八咫鏡とは、息津鏡と辺津鏡のことでしょうか？それは、卑弥呼が神事で使い始めた鏡に他なりませんよね？」

「(笑いながら) 今は言えん」

ここで、ようやく宮司様が言わんとされていることが理解できた。元々あった神器に、秦氏がユダヤの三種の神器を重ねたということである。それはこれまで調べてきたことで、明らかである。なお、海部宮司が言えることは、基本的に国内のことだけで、ユダヤとの絡みなどは言えない、ということである。

*弟橘媛（おとたちばなひめ）の入水（Wikipedia より）

日本武尊の東征に同行したが、走水（はしりみず）の海（浦賀水道）に至っ

た時、尊の軽はずみな言動が海神の怒りを招いた。そのため、海は荒れ狂い、先に進むことが不可能になった。海神の怒りを解くため、弟橘媛は「私は夫である皇子の身に替わって海に入水します。どうぞ皇子の東征を護らせ給え」と念じ、浪の上に菅畳（すがたたみ）八重、皮畳八重、絹畳八重を敷いて、その上に座って入水した。すると波が穏やかになり、船を進めることが可能になった。彼女が持っていた櫛は、7日後、海岸に流れ着いた。現在の東京湾沿岸には、こゆるぎという地名や、袖ヶ浦、袖ヶ浜などという地名が多くあるが、これは弟橘媛の帯や袖が流れ着いたという伝説に基づいて名付けられた地名である。

媛を忘れられない尊は、日本書紀では碓日嶺（うすひのみね、碓氷峠）、古事記では神奈川県足柄の坂本（足柄山）に於いて、「吾妻はや」（我が妻よ）と嘆いた。日本の東部を「あずま」と呼ぶのは、この故事に因む。

(5) 出雲

神宮の式年遷宮の話が出たところで、同年に遷宮が行われる出雲の話となった。

① 船井幸雄氏

「遷宮が終わるまでは、“裏”はピリピリしている。神宮と出雲の遷宮が同じ年なのは、それなりの意味があるでしょう」

「神宮が太陽神で陽ならば、出雲は大地の神で陰であり、陰陽の合一ですね。ということは、“御生れ”は近いのでしょうか？」

「よくは解らないが、あったとしたら一大事である。船井（幸雄）は、マヤ暦が1年違っていたと言っている（*）」

「そうなんですか…」

「船井はケチである」

「金持ちに限ってケチですし、何と言っても、経営コンサルタントですから…」

「船井は死んだら、相当ひどく言われるだろう…」

*マヤ暦の数え間違い（Wikipedia、船井幸雄.COM 参照）

スウェーデン人の医師、カール・ヨハン・コルマン博士が唱えたマヤ暦の解釈の受け売り。コルマンはマヤ暦の始まる日付を見直し、終わりの日を2011年10月28日と割り出した。従来説では2012年冬至。（12月21日）

船井氏はこのコルマン説に鞍替えし、2011年10月29日から、目覚めた人（有意の人）の意志により、人類の未来は決まると主張し、世の中は2011年から2020年が変わって“ミロクの世界”になる可能性が高いとしている。

この主張ならば、2011年でも2012年でも、どちらにも言い訳できる。それに、マヤの長老がこの説を認めた、とも言われていない。

② 出雲の悲劇

「出雲は確かに、大変なことがありましたからね…」

「どういうことでしょうか？」

「御神宝を渡す際、実際に、親子だったか、兄弟だったかの悲劇があった」

「伊理泥（イリネ）の話ですね。あれは、容易に権力を譲ったという話に脚色したものではなかったのですか？」

「かなりの真実に基づいている」

何と、伊理泥の話はノンフィクションだったのである。ここで、＜日本の真相 5＞に記した伊理泥の話を振り返る。まずは日本書紀の記述から。

“崇神天皇は出雲大神の宮に納められている神宝を確かめさせるため、武諸隅命を出雲に派遣した。神宝は出雲振根（イズモノフルネ）が管理していたが、丁度この時は筑紫に行っていたので、弟の飯入根（イイイリネ）が対応し、弟の甘美韓日狭（ウマシカラヒサ）と子の鷗濡渟（ウカヅクヌ）に神宝を持たせて献上してしまった。帰って来た振根は怒り、いつか弟を殺そうと考えた。振根は密かに刀とそっくりな木刀を作り、腰に掛け、水浴びに誘った。振根は先に上がり、弟の刀を身に付けると、弟は驚いて兄の木刀を取ったが、振根に切り殺されてしまった。”

これと良く似た話が古事記にある。倭建命＝日本武尊の出雲征伐の話である。

“景行天皇の命により、倭建命は出雲建（イズモタケル）を征伐しに行った。倭建命は木刀を作って身に付け、一緒に川に入り、倭建命が先に上がって出雲建の刀を取った。驚いた出雲建は上がって来て倭建命の刀を取ったが、抜くことができず、倭建命に切り殺されてしまった。”

＜日本の真相 5＞では、“日本書紀は、古事記の話を登場人物と時代を変えて焼き直したに過ぎない”としたが、そうではなく、“出雲”で起きた事件を基に、古事記では日本武尊を陥れ、横暴な人物に仕立てているのである。そして、最後まで御神宝を渡そうとしなかった氏族を、倭建命によって暗示している。また、実際には御神宝を渡してはいなかったとしたが、実際に渡されたのである。（こういうことは、実際にお聴きしなければ解らない。）

また、古事記では日本武尊こと小碓命（オウスノミコト）が兄の大碓命（オオウスノミコト）を殺したことにされているが、これなどはこの伊理泥の話を「合わせ鏡」で兄弟の関係を逆転させて創作した話なのである。

さて、＜日本の真相 5＞では古事記で存在が強調され、天之日矛の勢力範囲と一致している第 9 代・開化天皇の子とされる日子坐王（ヒコイマスオウ）の関係から、王と袁祁都比売命（オケツヒメノミコト）との間の子、伊理泥王（イリネオウ）に着目し、この人物こそが 13 世孫・志理都彦命（シリツヒコノミコト）の時代に権力委譲した張本人とした。そして、伊理泥王は海部氏に徐福あるいは始皇帝縁者の女性が嫁いで生まれた子の系統＝徐福系＝葛城氏で、その末裔が蘇我氏である、と。

海部氏の勘注系図に“イリネ”は登場しないが、古事記では伊理泥王の兄弟として大筒木真若王（オオツツキマワカノミコ）と比古意須王（ヒコオスノミコ）

が挙げられているので、出雲振根は大筒木真若王か比古意須王のどちらかで、弟とされる甘美韓日狭はその一方と考えられ、この兄弟間で御神宝をめぐる殺人が起きてしまった、ということである。

これで、出雲が格別な扱いであることが更に納得できた。宮司様が以前に言われたように、容易に権力を委譲したことだけではなく、そこには肉親間で血の犠牲が払われてしまったためである。だから、出雲の神は何かにつけて崇る神で、故に、丁重にお祭りしなければならず、参拝作法としても、神宮の正式な八度拝に次ぐ二礼四拍一礼なのである。そして、その祭り主は先祖供養も兼ね、伊理泥王の血統に限られるわけである。

また、1：(3)で葛城氏が「峻巖の柱」に相当していたのも、崇ることは“厳しさ”だから、この事件が葛城氏の間で起きたからに他ならない。

＜日本の真相 6＞では、出雲大社で祀られる大国主命の和魂が大物主神であるということは、出雲大社の本来の神は天照国照尊から地祇として分祀された大物主神が祀られるヤマトに鎮座している、という暗示で、その地は古代から“出雲”である、と記した。だから、この事件が起きたのも現在の出雲ではなく、太古の出雲、すなわち、ヤマトの出雲である。それは、纏向の出雲荘とダンノダイラの出雲があるが、どちらなのだろうか。

纏向からは元兵主神社（元桧原神社）を介して卑弥呼の邪馬台国の都介野岳を遥拝し、また、ダンノダイラを遥拝所として巻向山越に、トヨの大邪馬台国の新たな神山として選ばれた泊瀬山を遥拝した。邪馬台国の都介野岳を遥拝していたのは卑弥呼直系の海部氏と考えられるから、海部氏の本宗ではない伊理泥王の血統は、ダンノダイラの出雲から泊瀬山を遥拝していた出雲族だと考えられる。

ダンノダイラは秦氏に依る新たな神山である三輪山の傍にあり、丁重にお祭りしなければならない、何かにつけて崇る神を祀る場所としては、大邪馬台国からの祭祀の連続性を考えても妥当である。悲劇の主人公、伊理泥王は大和朝廷に於いて、大物主神として丁重に祀られるようになったのである。そして、その神祭りのために子孫の大田田根子が必要とされたことは、神祭りは特定の血統でなければならないということを示しているだけではなく、このような悲劇があったため、先祖供養をその子孫が行う必要があったためである。

③伊理泥王が渡した御神宝

＜日本の真相 5＞では、卑弥呼が神事で使い始めた息津鏡・辺津鏡は海部氏が代々手渡しで継承してきたことから、御神宝は渡していないとした。しかし、今回の対談で明らかになった事実からすれば、鏡ではないにしろ、何らかの御神宝は渡されてしまったのである。出雲がこのように権力委譲したことにより、最終的に海部氏もおそらくこの事件に妥協して、秦氏は王権と祭祀権を手にすることができたのである。

ならば、その御神宝とは何なのか。御神宝とは、三種の神器もしくはそれに準じるものであり、その悲劇の場所はダンノダイラ（の出雲）である。

息津鏡・辺津鏡こと大元の八咫鏡は海部氏が代々手渡しで継承してきたこと

から、その候補からは外される。よって、草薙神剣か勾玉か、あるいはそれ以外の極めて重要なものか、ということになる。“それ以外の極めて重要なもの”としては、卑弥呼に与えられたが現在行方不明となっている“親魏倭王”の金印が考えられ、これは飛鳥氏情報に依ると、八咫鳥が取り上げて、現在はある場所に保管されているという。

・金印

まず、神器ではない金印を考える。八咫鳥に取り上げられたので、これではないか、と真っ先に考えられるのだが、この金印が無くても、ダンノダイラに於ける太陽神祭祀に関しては、何の問題も無い。(纏向も。) また、卑弥呼が得たものだから、元々は海部氏が持っていたはずである。おそらく、一旦ある時点で息津鏡・辺津鏡共々秦氏の手に渡り、神宮に安置される八咫鏡としての写しを造った後、金印か息津鏡・辺津鏡のどちらかをそのまま秦氏の手元に残すように強制されたのではなかろうか。重要性からすれば、卑弥呼が神事で使い始め、太陽神の分身である息津鏡・辺津鏡を海部氏は選び、代々継承してきたのだろう。御神宝を渡した人が殺され、後に大物主神としてまで畏れ祀られるということは、やはり祭祀に関わる重要なもの、すなわち、神器と考えられる。

・勾玉

玉は王権のある土地の象徴である。この場合、ダンノダイラの出雲は泊瀬山の遥拝所だから、王権のある土地は纏向である。そこには海部氏がいたはずだから、勾玉は海部氏が持っていたと考えられる。

<日本の真相 5>では、伊理泥王の時代は 13 世孫・志理都彦命の時代であり、その次の代の川上真稚命（カワカミマワカノミコト）の亦名が丹波道主命で、この命の時代に海部氏の本宗が丹波に移動したと推察したが、伊理泥王の事件があって御神宝が秦氏に渡ってしまったが故に、次の代に海部氏の本宗が丹波に移動したことは辻褄が合う。

最終的に 18 世孫・丹波国造建振熊宿祢（タケフルクマノスクネ）が若狭の木津高向宮で海部の姓を賜り、以降は海部直となって臣籍降下させられ、皇位継承権を奪われた際に、王権のある土地の象徴である勾玉を渡し、以後、大和朝廷の地が新たなる大王家＝天皇家の土地とされたと考えられる。

・草薙神剣

ダンノダイラは大邪馬台国の新たな太陽神遥拝所であり、太陽神を祀るためにはその依り代である剣が必要とされたから、剣は纏向ではなく、こちらにあったはずである。あるいは、写しの剣を権力の象徴でもある鉄で造り、どちらかで草薙神剣（アロンの杖）を、もう一方で写しの鉄剣を依り代としていたのだろう。

新たな太陽神遥拝所では、伊理泥王の血統の葛城氏と共に、後に草薙神剣を預けられる尾張氏として分家する海部氏（高尾張氏）が共に祭祀を行っていたと考えられる。（<日本の真相 5>で、伊理泥王と高尾張氏である尻綱根命（シリツナネノミコト）は共に 13 世孫・志理都彦命の時代と推定。海部氏の本家は

纏向。)それ故、本身はダンノダイラに、写しは纏向にあったと考えられ、現在に至るまで、尾張氏の熱田神宮に剣は預けられているのである。

ここで、草薙神剣に関する興味深い伝承が熱田神宮に伝わっている。

“天智天皇 7 年 (AD668 年) に新羅の僧・道行が熱田神宮を参詣した際、清雪門より内部に侵入して草薙神剣を盗み出したが、新羅への帰路の途中で嵐に遭い、捕らわれの身となった。そして、草薙神剣は宮中で預かることになったが、天武天皇が草薙神剣の祟りにより病になって崩御し、朱鳥 (あかみとり) 元年 (AD686 年) に草薙神剣は熱田神宮に返還された。”

新羅は海部氏の祖先が建国した国であり、神器は特定の氏族にしか扱えないから、新羅の僧とは、海部氏を暗示している。そして、天武天皇こと大海人皇子は海部氏の一族だった。(＜日本の真相 4＞参照。) ならば、この伝承は草薙神剣が一族の手によって一旦秦氏の手に移ったものの、本来の持ち主である尾張氏の下に戻ったということを暗示していると考えられる。これは、飛鳥氏が八咫鳥から聞いた、“その時” が来るまで熱田神宮で預かってもらっている、ということ、つまり、一旦は秦氏が草薙神剣を手にした、ということと矛盾しない。

ここで、更に重要な示唆について考える。それは、草薙神剣の神話上での由緒である。高天原を追放されたスサノオは出雲に下り、八岐大蛇を退治して、その尾から草薙神剣を得た。そして、女神・天照大神に献上し、後に神宮に預けられ、日本武尊の手に渡った。

＜日本の真相 6＞では、蛇はシュメールと聖書の観点から地祇の大物主神の性質として選ばれ、本来の神“ヤー”と蛇神 (原型となっているシュメールの「神々」) を連想させる“八岐大蛇”という存在を秦氏は創り上げ、海部氏が元々持っていたアロンの杖＝草薙神剣を、スサノオが八岐大蛇の尾を切って手に入れたことにされたが故に、蛇神が剣の象徴と成り得る、とした。

このように蛇の性質は説明できるのだが、今回明らかになったことも考慮すると、次のように考えられる。すなわち、殺された伊理泥王を崇る神“大物主神”として祀り、その大物主神は出雲に関わる蛇神である。(出雲の大国主命の和魂が大物主神。) 出雲に関わる蛇は、シュメールの「神々」(特に“ヤー”) を根源とした八岐大蛇である。そこで、“出雲”と“蛇”というキーワードにより、大物主神の根源には御神宝を渡して殺された伊理泥王の存在がある、ということを暗示しているのである。つまり、伊理泥王が大蛇であり、丁重に祀らなければ崇る恐ろしい神なのである。そして、伊理泥王が剣を渡してしまったことは、大蛇から御神宝である剣が出てきたことにされたわけである。

神話上ではスサノオが渡したことにされているが、それは海部氏を荒ぶる神として陥れた結果、話の流れとしてそのようにされてしまったわけで、本来はスサノオ＝海部氏は反対していた側で、「合わせ鏡」とされている。そして、献上した相手の女神・天照大神は秦氏の創作した最高神だから、スサノオが剣を献上したことは、御神宝である剣が秦氏に渡されてしまったことを暗示しており、ここで考察したことと矛盾しない。その後、剣は本来の持ち主である海部

氏系の尾張氏に渡されたが、それが神宮（女神・天照大神を祀る秦氏の象徴）から日本武尊へ剣が渡されたことになっているのである。

ここで、＜日本の真相 5＞では八岐大蛇退治の話を、勘注系図の 16 世孫・丹波国造大倉岐命（オオクラギノミコト）が桑田郡大枝山邊の大蛇を斬ったという伝承に基づいて考察した。それは、大倉岐命の亦名が大楯縫命（オオタテヌイノミコト）であり、この名に因んでいると思われる出雲の地名“楯縫郡”と、出雲国風土記にある“意宇郡 母理郷 大穴持神 越の八口（やくち）を平（ことむ）け賜いて還りますとき”という記述から、古代丹波王国での出来事を、出雲という狭い範囲に限定して創作されたのが八岐大蛇の話であり、元は大倉岐命に依る桑田郡の大蛇退治の話だった、とした。

しかし、そうではなく、大和の出雲で起きた事件を大倉岐命による大蛇退治と大穴持神による平定という話にしたのであろう。

よって、伊理泥王が渡した御神宝は太陽神の依り代である草薙神剣と考えられる。これにより祭祀権が秦氏へと移り、その後、勾玉が渡されて王権が委譲され、海部氏は臣下へと下ったのである。そして、親魏倭王の金印と息津鏡・辺津鏡も一旦秦氏が没収し、新たな神器として鏡と剣の写しを造った後、金印はそのまま秦氏が預かったが、草薙神剣は尾張氏に、息津鏡・辺津鏡は海部氏に戻されたのである。

勾玉は王権のある土地の象徴であり、その土地は国内に 1 箇所だけだから、勾玉の写しは造らなかったと考えられる。その代わり、海幸彦と山幸彦の話を創り上げ、勾玉と壺が同一であることを暗示させ、応神天皇が持って来たマナの壺を海部氏に与えたのであろう。つまり、これまでマナの壺は応神が海部氏に婿入りした印と見なしてきたが、それだけではなく、勾玉の代わりとして、かつて王権を握っていた氏族を暗示するものだったのである。だから、代々の海部氏は宮司を継承すると、壺の一部を少々削って飲んでいたわけである。海部氏にとっての本来の御神宝ならば、御神宝に傷を付けることなどないはずである。

ここで、元の伝承を振り返ると、弟の飯入根が対応し、弟の甘美韓日狭と子の鸕鷀渟が御神宝を渡してしまった。“日”は太陽神、“渟”は天武天皇の諡号“天渟中原瀛真人天皇（アマノヌナハラオキノマヒトノスメラミコト）”にも含まれる字で、“玉のような、玉のように輝く、玉、勾玉”の意であり、“飯”は神饌の稲を暗示するから、ここで太陽神を祀るために欠けているのは剣（象徴としては水）である。故に、渡してしまった御神宝が剣であることを、これら 3 人の名前で暗示しているのだろう。（ならば、本来の名ではないということ。）

偶然にも、水浴び後に剣で切られたことは、象徴として剣＝水で一致する。

④石上神宮の剣

ここで、石上神宮の宮司が言われた言葉を思い出した。それは、「この剣は八岐大蛇を切った剣、熱田神宮の剣は八岐大蛇の尾から出てきた剣」という言

葉である。

石上神宮の由緒書きに依ると、祭神は石上大神であり、神武東征時に熊野の高倉下が差し出した一振りの太刀である布都御魂大神（フツノミタマノオオカミ、鹿島の武甕雷神＝武甕槌命が授けた）、物部氏の十種神宝の内の起死回生靈力である布留御魂大神（フルノミタマノオオカミ）、そして、スサノオが八岐大蛇を切った十握剣の靈威である布都斯魂大神（フツシミタマノオオカミ）である。宮司が言われたのは、この中の布都斯魂大神のことである。

日本書紀では伊勢神宮と石上神宮のみが「神宮」と記載されており、それは、神武天皇が即位後に物部氏の遠祖・宇摩志麻治尊（ウマシマチノミコト）にこの神剣を授けて宮中で奉祀させ、その後の崇神天皇の治世 7 年に、物部連の祖の伊香色男命（イカガシコオノミコト）が、天皇の勅命により神剣を石上の布留の高庭に遷したためである。（故に、石上神宮は物部氏の氏神とされている。）その後、平安時代に成立した延喜式では、石上神宮に代わって鹿島と香取が「神宮」と記載された。（Wikipedia 参照。）このように、石上神宮は極めて重要な位置にあるのだが、後に「神宮」から降格させられていることからすると、ここには何か隠されている。そこで、“石上大神”が何を暗示しているのか考える。

<日本の真相 5>では<神々の真相 2>での考察を基に、次のように考えた。布都努斯＝経津主命（香取神宮の祭神）で、神武東征時に高倉下が持って来た太刀は布都御魂＝布都御魂大神であり、武甕槌命が中洲を平定した時に持っていた神剣と言われ、布都御魂＝アロンの杖＝草薙神剣である。そして、経津主命が祀られる香取神宮には門外不出の神器があり、それは秘祭で使用される 12 個から成る“壺ヤー（ジャー）”であり、マナの壺を象徴していた。そうすると、香取神宮は祭神でアロンの杖、神器でマナの壺を象徴していることになる。

鹿島神宮はアロンの杖を象徴するが、祭神名の中に“甕”があり、これは“壺”に他ならない。つまり、鹿島神宮は神器でアロンの杖、祭神でマナの壺を象徴し、香取神宮と表裏一体の関係である。ならば、石上大神の内の布都御魂大神は神器としてアロンの杖を、祭神名としてマナの壺を暗示しているわけである。御神体としては、アロンの杖の写しだろう。

布留御魂大神は十種神宝（息津鏡、辺津鏡、八握剣、生玉、足玉、死反玉、道反玉、蛇比礼、蜂比礼、品物之比礼）のことで、ニギハヤヒが降臨する際に天津神が授けたもので、「ひふみの祓詞（死者蘇生の言霊）」や十種神宝の名前を唱えながらこれらの品々を振り動かせば、死人さえ生き返るほどの呪力を発揮するとされたものである。宇摩志麻治尊から神武天皇に奉られ、崇神天皇 7 年に石上の布留の高庭に遷されたとされる。

息津鏡・辺津鏡が含まれ、しかも“蘇生＝復活＝不老不死”ならば海部氏の暗示で、卑弥呼が神事で使い始め、本来の八咫鏡である息津鏡・辺津鏡の暗示でもある。更に、“布留”という名称で、海部氏に婿入りした実質の秦氏の初代天皇である応神天皇の本名“真沸流（マフル、姓が真で名が佛流）”をも暗示している。

このように見てくると、スサノオが八岐大蛇を切った十握剣の靈威である布

都斯魂大神はどの神器や御神宝にも相当しなくなるのだが、ここで思い出すべきは、大蛇とされた伊理泥王である。前述のように、伊理泥王が剣を渡してしまったことが、(八岐)大蛇から御神宝である草薙神剣が出てきたことにされたことからすると、大蛇＝伊理泥王を切ったのは海部氏(スサノオ)に忠実だった出雲振根だから、出雲振根が伊理泥王を切った剣が布都斯魂大神とされ、渡してしまったアロンの杖の写しと共に、鎮魂のために祀られていると考えられる。ならば、布留御魂大神の“布留”は、応神天皇よりも“振根”を暗示していると考えた方が、物部氏の氏神としては相応しい。

よって、“石上大神”とは、出雲振根が伊理泥王を切った剣＝布都斯魂大神と伊理泥王が秦氏に渡したアロンの杖の写し＝布都御魂大神、そして“蘇生＝復活＝不老不死”と息津鏡・辺津鏡を暗示する布留御魂大神(これも鉄剣か？あるいは国宝・七支刀(ななつさやのたち)か？)のことであり、これらを一緒に奉じることによって伊理泥王の御魂を鎮魂し、出雲の哀しい歴史を暗示しているのである。

伊理泥王は海部氏と婚姻関係を結んだ徐福の系統＝葛城氏の系統であり、同族とは言うものの、伊理泥王が裏切った時点が海部氏と出雲氏の分岐点と言えるので、石上神宮が物部氏(狭義の意味での物部氏＝徐福系)の氏神とされているのは辻褄が合う。そして、伊理泥王は祟る神として三輪山の地祇・大物主神と合祀されたが、伊理泥王を切った剣と切られる原因となった剣の写しが石上にあるので、三輪山の大神神社ではなく石上の方が「神宮」とされたのである。

その後、秦氏は鹿島の武甕槌命、香取の経津主(布都努斯)命を勧請し、創り上げた神話に於いて天岩戸の前で祝詞を捧げた天兒屋根命と、男神で本来の天照大神(＝天照国照尊)を暗示する比売大神(宗像三神)を合わせて祀り、自らの氏神として春日大社を建立し、新たな国家守護の拠点とした。それにより、石上神宮の鎮魂と国家守護の役割は終わり、新たに鹿島と香取が「神宮」とされたのである。

(6) 仁徳天皇と難波

一族だった出雲の話から、難波の話へ。

「伴とし子さんが、仁徳天皇陵などについて執筆中ですよ」

「仁徳と応神は同一人物だと考えますが…」

「仁徳陵のある難波は風だから、本当の“難波”ではない。難波はこちらが本場で、若狭から出れば、すぐに海は荒れるから難波である」

「難波宿禰ですね」

「難波根子建振熊命である」

このお話から察するに、難波という地名の大元は、籠神社東側の山裾で天橋立の北側に位置する付近の難波野であり、15 世孫・丹波大矢田彦命(亦名が難波根子建振熊命)が治めて活躍していた中心地がこの難波野付近なのであろう。

故に、“難波の元”という意味で“難波根子”なのである。＜日本の真相 5＞では、15 世孫・丹波大矢田彦命の亦名は難波根子建振熊命で“難波の大元”という意味なのはおかしく、実は（大阪の）難波を手中にした秦氏の象徴なのかもしれない、としたが、そうではなかったのである。そして、14 世孫・川上真稚命は難波根子建振熊命の父あるいは大王の世代として一世代上であり、この地域に海部氏の中核が戻って来たのが 14 世孫の時代だから（＜日本の真相 5＞参照）、その亦名が大難波宿祢となっているのである。

＊＜日本の真相 5＞では 15 世孫・丹波大矢田彦命の亦名が難波根子建振熊命で、武振熊＝難波根子建振熊命と武内宿禰に命じて忍熊王（オシクマノミコ、仲哀天皇の皇子）を征伐させて、和珥臣の祖とした、という日本書紀の記述から、難波根子建振熊命と建振熊宿祢が同一人物であるかのような印象を与えてしまったが、そうではない。

では、大阪の難波に世界最大の墳墓が造営された仁徳天皇もこの 15 世孫・丹波大矢田彦命＝難波根子建振熊命ということなのだろうか？＜日本の真相 5＞で考察した系図一覧では、15 世孫は成務・仲哀天皇の時代に相当し、応神天皇の時代には 17 世孫・丹波国造明国彦命と 18 世孫・建振熊宿祢が該当するから、15 世孫では早すぎる。そこで、応神天皇と仁徳天皇について、記紀の記述をしてみる。

記紀では（以下、Wikipedia 参照）、第 15 代・応神天皇は軽島豊明宮（かるしまのとよあきらのみや、奈良県橿原市大軽町？）に都を置いたとされ、難波にも大隅宮（おおすみのみや、大阪市東淀川区大隅？）が置かれた。

その子、第 16 代・仁徳天皇は難波高津宮（なにわのたかつのみや、大阪府大阪府中央区？）に都を置いたとされ、菟道稚郎子（ウジノワキイラツコ）皇子と互いに皇位を譲り合ったが、皇子の薨去により即位したという。その間の 3 年間、皇位が空位だったことはおかしく、“ウジ＝ウツ”で海部氏系を暗示していること、日本書紀では仁徳天皇に皇位を譲るために菟道稚郎子は自殺したと伝えられていることからすると、この皇位継承話はかなり信憑性に問題がある。

また、事績の一部が父の応神天皇と重複・類似することから、元来は 1 人の天皇の事績を 2 人に分けたという説があり、播磨国風土記では、大雀天皇と難波高津宮天皇として書き分けられており、2 人の天皇の事跡を 1 人に合わせたとも見なせる。（仁徳天皇の諡号は大雀命＝大鷦鷯尊（オオサザキノミコト）。）

更に、日本書紀仁徳の条の冒頭では、仁徳天皇は五百城入彦皇子（第 13 代・成務天皇の弟）の孫となっているが、この記載は古事記応神の条の冒頭にある記述、すなわち、大雀命の母、中日売の父が五百木入日子（＝五百城入彦皇子）の子、品它真若（ホムダノマワカ）となっている記述と矛盾する。（この場合、大雀命は五百城入彦皇子の曾孫となる）。それ故、応神－仁徳の系譜が創作であることが伺われる。

つまり、応神天皇と仁徳天皇はあたかも同一人物のようにも見えるが、別人

だとしても、ほぼ同時代に存在した大王クラスの人物だと言える。応神天皇の真相は<日本の真相>などで記したように、海部氏を抑え込んだ秦氏の大王、真沸流であり、海部氏に婿入りし、最終的に王権を授かった。それにより、海部氏の大王の血統である建振熊宿祢は若狭の木津高向宮で海部の姓を賜り、以降は海部直となって臣籍降下させられ、皇位継承権を奪われた。建振熊宿祢の“熊”は、日神の前に跪くこと、すなわち、日神を祀ることを暗示しているから、明らかに海部氏の大王である。また、若狭の海人 300 人を率い、水主（かこ）となって奉仕した海人族の大王である。（<日本の真相 5>参照。）しかし、その前の代までは丹波国造とされてはいるものの“命（ミコト＝神、天皇）”扱いなのに対し、この 18 世孫は“命”ではなく“宿祢”とされていることは、まさしく、皇位継承権を奪われて臣籍降下させられたことを暗示している。

そして、これまでの流れ、すなわち、古代の根幹を成す祭祀の流れを振り返ると、海部氏は抑えられたものの、祭祀は連綿と継続され、そこに秦氏のカッパーラが上乘せされた。とりわけ、この王権委譲の前に起きたイリネの御神宝譲渡では一族内で血の悲劇があり、それこそが出雲の神々を丁重に祀らなければならぬ理由であることは、(5)に記した通りである。

ならば、仁徳天皇も同様の扱いとされているに相違無い。すなわち、仁徳天皇とは、皇位継承権を譲らされた悲劇の大王、18 世孫・建振熊宿祢のことであり、古事記では大徳の高い天皇とされ、大阪の難波には世界最大の墳墓が造営され、最大級の賛辞と敬意が表されているのである。そして、本来の難波と関わりが深く、皇位継承権を譲らされた悲劇の大王を暗示するため、18 世孫の御名は 15 世孫・難波根子建振熊命という御名から“難波根子”を外した御名にされていると考えられる。

古事記では、仁徳天皇の後の 1 人が八田若郎女（ヤタノワカノイラツメ）で、海部氏が持っている本来の八咫鏡（息津鏡・辺津鏡＝日神の分身）を暗示するが、建振熊宿祢の“熊”は日神の前に跪くこと、すなわち、日神を祀ることを暗示しているから、八田若郎女は仁徳天皇が建振熊宿祢であることを暗示している。また、妃の 1 人、黒日売（クロヒメ）は吉備の海部直の娘となっており、やはり、仁徳天皇が海部氏一族と深い関わりがあることを暗示している。

建振熊宿祢は若狭の木津高向宮で海部の姓を賜り、応神は海部氏に婿入りした時点では、当然、丹後にいたと考えるのが妥当である。その後、応神は大和朝廷の中心地だった大和に入り、そこから物部氏のもう 1 つの中心地だった大阪の難波付近に行って、海部氏に代わる新たな大王として難波高津宮とされる都も開いたのだろう。その応神に、仁徳＝建振熊宿祢の話が重ねられ、あたかも両者が同一人物であるかのような印象を与えているのと同時に（これも象徴の重ね合わせであり、カッパーラに他ならない）、仁徳＝建振熊宿祢には最大の敬意を表しているのである。

最終的に、秦氏への権力委譲は建“振”熊宿祢の時代に達成され、応神天皇が秦氏の初代天皇となった。御神宝を渡した出雲“振”根の話はこれよりも以前だが、“振”という字によって、王権の象徴（一方は御神宝＝剣、もう一方は

皇位)を譲ったことを暗示している。(皇位の委譲時には、王権のある土地の象徴である勾玉も譲渡させられたはずである。代わりに、応神が持って来たマナの壺を与えられた。)これは、応神天皇の名が真沸流で、“フル”を含むからに他ならない。つまり、“建振熊”や“振根”という名前は元々の名前ではなく、応神天皇の名“真沸流”に合わせて、後から創作された可能性がある。“沸流”という名は百済本記にも登場するので、この逆は無いだろう。

(7) 明治政府

明治政府のバックは長州だが、長州は御所に向かって大砲を打ち、グラバーを通じてフリーメイソンとの関わりが疑われるので、明治政府についてお訊ねした。

「明治政府とは、何なんでしょうか？」

「(かわされ) 明治天皇は、神宮の神器を直接見たとされている」

「勅封ですね」

「歴代の天皇は、これまでされていなかった」

「とすると、(天武天皇の意志を継いで) 現在の神宮の体制を整えたとされる持統天皇も、実は参拝されていない可能性がある、ということでしょうか？」

「その可能性はある…」

持統天皇が初めて神宮に参拝し、その後の明治天皇までは、歴代天皇で参拝された方はいないとされている。しかし、持統天皇すら、参拝されていない可能性がある、ということである。

(8) 日本の古代と現在

＜日本の真相 5＞は宮司様の義理の父、海部穀定氏の著書「元初の最高神と大和朝廷の元始（桜楓社）」を基に作成したが、これが理解できなければ、古代史は何も解らない。

「穀定氏の著書を読破しなければ、日本の古代については何も解りません」

「その通り。あれはとても難しい。良く理解できましたね？」

「はい、何とか系図を表にして、伴とし子氏の著書も合わせてようやく理解できました」

「(微笑まれる)」

「歴史の重要点では、兄から弟へ移譲されていますが、今はまさにそのような状態なので、いよいよ“その時”は近いのではないかと思います…」

「そうなのだが…、なかなかそうさせない勢力がある。現在の皇室、特に雅子妃と女系問題に関しては、とても危惧している」

未購入だった「前ヤマトを創った大丹波王国—国宝「海部系図」が解く真実の古代史（伴とし子著、新人物往来社）」を授与所で購入したが、そこには、古代では弟継承が一般的だったことが記載されていた。それが、おそらく秦氏に

権威が移譲されてから、長兄継承とされたのだろう。

ならば、魏志倭人伝に記載されている卑弥呼の“男弟”とは、本当に弟だったと考えるのが妥当である。だから、日本武尊の逸話でも、日本武尊が能褒野の地で亡くなったことにされ、弟の稚足彦尊（ワカタラシヒコノミコト）が皇位を継いでいる（成務天皇）のは、こういった古代の継承制度を暗示しているのだろう。それにしても、この国を裏から動かしている組織は単に八咫鳥だけではないようで、思った以上に複雑である。

(9) 資料の公開時期

いずれにしろ、今年から来年にかけて大変な年となりそうなので、資料の公開時期についてお訊ねした。

「資料はいずれ公開する予定ですが、その“印”が解らないので、宮司様にこうやってお訊ねするしかございません。それとも、何か他に…」

「…御遷宮が終わるまでは、公開は駄目である。“裏”も、御遷宮が終わるまではピリピリしている。しかし、…何か人知を超える現象が起きた場合は別である！」

「解りました」

「これからは豊受大神の時代である！」

内宮は（女神の）天照大神で、外宮は豊受大神だが、これは秦氏が分祀し、内宮にイエスも重ねて祀ったためである。本来は天照国照尊＝豊受大神＝本来の天照大神だから、豊受大神の時代とは、降臨によってすべてが明らかにされ、本来の祭祀が復活することに他ならない。

それは、太陽神ウツと共にイエスが降臨するのもかもしれないが、最高神イナシナとエンキ、そして、カッバーラを仕掛けたニンギシュジツダが勢ぞろいしても、いずれも日本神界を構成する根源神だから、何の矛盾も無い。

「本日は突然の訪問なのに、このようにお話しさせて頂けたことを、大変恐縮に思います」

「あなたは、重要なことを調べているから」

最後はご丁寧にお見送りまでして頂き、本当に感謝してもしきれない。

3：海部氏の真相

海部氏が何者なのかは、海部宮司は言えない立場にある。これまでは天香語山命は北イスラエルの祭祀レビ、天村雲命はエフライム族の大王で、海部氏はエフライム族の大王家と見なしてきた。しかし、今回の対談で、最高神はイナシナであること、神社がシュメールの「神々」を祀る神殿であることが明確になったことから、他に可能性は無いのか、海部氏について再考する。

(1) シュメールからの直接渡来

すべての根源はシュメールである。シュメールは異民族の侵入によって滅びたのではないか、と言われているが、真相は<神々の真相 1>に記したように、「神々」の核戦争に巻き込まれたことが原因である。壊滅を免れた者たちやその末裔は中東の様々な場所に散らばって行ったと考えられるが、その中の一派が直接日本に渡来したことは考えられる。

しかし、その核戦争は<神々の真相 1>に記したように BC2024 年に起きた。その時点から直接渡来したとすると、海部氏の起源はかなり遡ることになる。神武天皇が日本を平定したのが BC660 年とされていることからしても、それは遡りすぎである。また<日本の真相 5>に記したように、海部氏の渡来後、やや遅れて徐福一団が渡来し、海部氏と和平を結んだ。徐福は秦の始皇帝の時代 (BC246 年～BC221 年) だから、BC2000 年前後というのはあり得ない。

よって、シュメールのどこかの都市からの直接渡来はあり得ない。

(2) 歴史

核戦争後のシュメールからの直接渡来は否定されたので、その後のメソポタミアの歴史を見てみる必要がある。ここでは主に「文明のあけぼの (三笠宮崇仁著、集英社)」、「古代メソポタミアの神々 (岡田明子・小林登志子著、三笠宮崇仁監修、集英社)」、「シュメール—人類最古の文明 (小林登志子著、中公新書)」を参照し、支那の秦帝国に関わりがある古代ペルシャ帝国までの考察で、私見を*で記している。なお、バビロニア王国は明らかにシュメール系であり、主神はマルドゥクだから省略する。

① ヒッタイトとミタンニ

ヒッタイト王国は BC1700 年～BC1200 年頃とされている。太陽崇拝があり、鹿や牛の像があったが、それらは太陽崇拝に結び付けられており、太陽を引く馬の像などが残されている。アナトリア高原のハッティ人が根源とされ、天候を司る神を主なる神とし、太陽女神をその配偶神と考えていた。

鉄の短剣が出土しており、発掘された鉄製品としては世界最古 (BC2300 年～BC2100 年頃) とされている。アナトリア高原は鉄鉱石の産地であり、後に異民族が侵入してきてヒッタイト王国を建国した。

ヒッタイトはバビロンを攻略したが、本国に引き上げた後、バビロニアで支配権を獲得したのはカッシート王朝 (BC1500 年頃～BC1155 年) である。

その建国とほぼ同時期に、メソポタミア北部にフリ人 (*後述) が建国したのがミタンニ王国である。彼らは特に馬の取り扱いに習熟しており、ヒッタイトとミタンニは激しく争った。

ミタンニとエジプトは政略結婚により同盟を結び、アッシリアと対抗した。アメンホテップ三世 (BC1402 年～BC1364 年) は政略結婚の申し子である。

通説では、BC1190 年に“海の民”によって滅ぼされたとされている。

*シュメール人が突如いなくなっ、その後、ヒッタイト人が突如として現れたことは、ヒッタイトがシュメールの系統ではないか、と思わせる。それに、

アナトリア高原はイシュクルの領地で鉄鉱石の産地であり、イナンナやウツが大いに関係している。そのような場所ならば、製鉄のような高度な技術がシュメールから受け継がれていたとしても、不思議ではない。

しかし、鉄については<神々の真相 1>に記したように、大洪水後のまだアヌが地球に公式来訪する前、シュメール、エジプト、インダスの三大文明を創成することが決定される以前に登場している。それは、マルドゥクの息子の中で殺人が起きた時である。マルドゥクの息子アサル（オシリス）がイギギの策略によって殺され、その息子ホロン（ホルス）が復讐する際、大叔父ギビルが金属の技術と鍛冶、特に鉄と呼ばれる金属の秘密を教え、ホロンはそれらで武器を作り、忠実な地球人の軍隊を招集して戦ったのである。ならば、製鉄技術はヒッタイトのみならず、人類初の文明であるシュメール文明が起こる以前から既に存在していたので、特にヒッタイト人の発明というものではない。

ここでは太陽崇拝が重要で、これはまさしく太陽神ウツである。天候を司る神＝イシュクルを主なる神としたことは、イシュクルの領地だったからである。そして、太陽女神をその配偶神としたことは、イシュクル、ウツ、イナンナが兄弟のように仲が良かったことに依る。特に、太陽神は日本以外の国では男神だが、ヒッタイトに太陽女神という概念があったことは、注目すべきである。

また、ヒッタイトには八岐大蛇退治の基となった神話がある。竜神イルルヤンカシュと嵐神プルリヤシュの戦いである。（以下、Wikipedia 参照。）イルルヤンカシュ（別名イルヤンカ）は海の支配者とされ、ハットウシャ（有名なボアズキョイの近郊）出土の粘土板に記載されている竜である。

・バージョン 1

嵐神プルリヤシュと竜神イルルヤンカシュが争った時、イルルヤンカシュの強大な力の前に、天候神である嵐神プルリヤシュは敗れ去った。そこで、風と大気の神である女神イナラシュに助力を求めた。

女神は盛大な酒宴を開き、イルルヤンカシュを招き、イルルヤンカシュを泥酔状態にした。女神は人間の中から選ばれたフパシヤシュという男に、泥酔して動けなくなったイルルヤンカシュを縛ることを依頼した。フパシヤシュは女神と一夜を共にすることを条件に、イルルヤンカシュを縛り上げた。その後、嵐神プルリヤシュにより、イルルヤンカシュは殺された。（この後、フパシヤシュは女神の家に軟禁され、最終的には女神によって殺された。）

・バージョン 2

嵐神プルリヤシュが竜神イルルヤンカシュに敗れ、竜神に心臓と眼を奪い取られた。嵐神の心臓と眼は、神としての力の源を意味する。竜神に逆襲すべく、嵐神は人間の娘と結婚し、男子をもうけた。

その男子が成長すると、嵐神は心臓と眼の在り処を聞きだすため、竜神の娘に婿入りさせた。在り処を聞きだした息子は、竜神から眼と心臓を譲り受けた。息子はそれを嵐神に渡し、嵐神は再び蘇った。嵐神は再度、竜神に挑むが息子は竜神側にいた。息子は妻を見捨てることなどできなかったのである。「我は竜

の血族、私を助けるな！」という声を息子は天に向かって叫んだ。その声を聞いた嵐神は、心おきなく、息子共々竜神を殺した。

ここでは、明らかにバージョン1が相当する。ハットウシャはトルコにあり、かつては天候神で雷神のイシュクルの領地だったから、嵐神プルリヤシュはイシュクル、風と大気の神である女神イナラシュは、イシュクルと兄弟のように仲が良かったイナンナである。ここでは、イナンナに“風と大気”というエンリルの性質が付与されている。また、“女神と一夜を共にする”ということで、イナンナの“聖婚”が暗示されている。

この地域は<神々の真相1>に記したように、マルドゥクが自らの正統性を流布し始めた地域だから、イルルヤンカシュはマルドゥクである。このような神話が基となって、竜は悪いイメージとなっている。これはまた、海部宮司が言われた“悪い蛇”でもある。対して、“良い蛇”はエンキとニンギシュジツダである。

さて、八岐大蛇の逸話ではスサノオが大蛇を切ったことになっているが、ここではイナンナが策を練り、イシュクルが切っている。八岐大蛇を切った十握剣は尾を切った時に刃が欠けてしまい、そこから草薙神剣が出てきたので、当時の武器から考えれば、十握剣は青銅剣、草薙神剣は鉄剣ということで、製鉄技術を暗示している。そして、スサノオの原型はイナンナだから、やはり八岐大蛇退治の逸話はこの神話が基になっているのである。

しかし、だからと言って、ヒッタイトからの渡来だとは必ずしも言えない。製鉄技術はシュメール文明以前から存在したし、ヒッタイト王国はBC1700年～BC1200年頃だから、王国崩壊後に直接渡来したとしたら、やはり遡り過ぎである。そこで、ゼカリア・シッチン氏の「人類を創成した宇宙人（徳間書店）」を再考する。

ある時点で、インド・ヨーロッパ語を話す民族が北イランかコーカサス地方を中心とした地方からインド方面まで移動した。彼らがアーリア人（高貴な人間）である。アーリア人はインドにヴェーダをもたらし、ヒンズー教は“人間の手に依らない”神聖な経典としてヴェーダを基本としている。インドの創造神はイナンナだが、ヴェーダはサンスクリット語は勿論のこと、ギリシャ語やラテン語などヨーロッパ系言語の祖先であり、ギリシャ神話とヴェーダの神話は類似している。

ちなみに、<神々の真相3>に記したように、インドの主神シヴァはイナンナが原型だが、髪に聖なるガンジスの女神ガンガーがいて、そこからガンジス川が流れ出している。スサノオは八岐大蛇退治の際、櫛名田比売を神聖な櫛の姿に変え、自分の髪に刺したが、これなどはスサノオの原型が牛頭天王＝シヴァであることを如実に物語っており、ヒッタイトも含めてすべてに共通するのはイナンナである。

閑話休題。もう一方は西方へ移動し、ヨーロッパへと辿り着いた。ギリシャへの窓口となっている場所がアナトリア高原である。そのアナトリアにある大

きくて有力な国がヒッタイトである。ヒッタイトの主神は雷と稲妻の神テシュブ＝イシュクルであり（ギリシャでのゼウス）、他にもシュメールの「神々」を祀っていた。エンリルは“古い神”、エンキは“昔の神”と言われ、アヌは天の王だった。そして、ヒッタイト語には大量のシュメールの象形文字、音節、言葉が使われており、シュメール語が高度な学識の言語だった。

シュメールとヒッタイトを繋ぐ架け橋は、実はフルリ人（フリ人）である。旧約ではホライト（ホリ人、自由な人々）と言われ、シュメールからアッカド、アナトリアまでの広い範囲を支配していた。このフルリ王国はミタンニと呼ばれ、ヒッタイト人は彼らのことをフルリ（Hurri、フリ）と呼んだ。

このフルリはインド・ヨーロッパ語族であり、ヴェーダと同じ名前によって幾つかの神々を呼んだ。そして、文化的・宗教的にヒッタイトに影響を与え、ヒッタイトの神話はフルリに由来することも判明している。そのフルリには明らかにアッカドの要素があり、アッカドはシュメールとの関係が密である。

つまり、フルリはシュメールのコピーであり、ヒッタイトは更にそのコピーなのである。

フルリはシュメールの栄光の時代の最後、ウル第3王朝（BC22世紀からBC21世紀）の頃、大きな勢力を保っており、シュメールで服飾産業を管理し、人材を供給していた。しかし、BC2000年頃、イビ・シン王の時代にエラムの侵攻によりウルは陥落し、王は連行されてウル第3王朝は滅亡した。その後、ウルはバビロニアの勢力下となったが、その際に一部が北方へ移動し、ミタンニ王国を築いたのだろう。また、ウルに残ったフルリは、BC1300年に大規模な移住と侵略の中（ヘブライ人のエジプトからカナンへの脱出を含む）、北東の方に退き、ミタンニ近郊のバン湖の近くで新たな首都を造り、王国をウルアルトゥ（アララト）と名付けた。その地で、彼らはテシュバ（テシュブ）を崇拝し始めた。そして、主な廟をビトアヌ（アヌの住宅）と呼んだ。

つまり、ヒッタイトにしろフルリにしろ、シュメールの直系と言える民族（王国）なのである。

②カナン（フェニキア）

カナンの歴史はシュメール時代にまで遡る。“海の民”の侵入があったが、その後、著しく発展している。前述のヒッタイトもBC1200年頃、“海の民”によって本拠地を追われた。

古いカナン暦では、秋分の頃（現行暦の9～10月頃）から1年を数え始めた。この時期は雨が降らない夏が過ぎ、秋の雨が降り出して、種まきを始める時期である。ダビデ王国以後もこの暦が採用されていたが、BC604年頃のエレミヤ書に依れば、1年は春から始まるように変えられた。これはバビロニア暦の影響で、この直前にネブガドネザル二世がエジプト軍を破っており、カナン地方が新バビロニアの勢力範囲に入ったためである。

エジプトは当時（BC13世紀頃）、カナンのことを“フル”と呼んだ。これは、フルリ人に由来する。アッカド王朝時代、アルメニア地方を起源とするフルリ

人がチグリス川東方からカナン地方まで進出した。(BC18 世紀の出土記録が最も古い。) 風習として、実子が無い時には養子を迎え、その後で実子が生まれればその実子が第一相続人となるが、この風習は旧約のアブラハムの子の記述などに見られる。

カナンの歴史を振り返る時、見逃せないのはエジプトのアマルナ文書に出てくるハビル人である。ハビルは民族には関係無いグループで、シュメール語でサ・ガズ（破壊者、虐殺者、暴民などの意）と同じ意味である。ウガリト文書ではアピルとされている。彼らは一定の共同体から疎外された人々で、徒党を組んで略奪したりして、乱世を生きぬいた人々で、日本で言えば戦国時代の野武士に相当する。

カナンで活躍したのは他に、ペリシテ人がいる。“海の民” の一派で、おそらくシリア方面から南下して来た。カナン地方が後にギリシャ人によって“ペリシテ人の地方” という意味で“パライスティネ” と呼ばれ、これが現在の“パレスチナ” である。ペリシテ土器には水鳥や尾が魚の尾のような水鳥が描かれている。また、ペリシテ人によって、契約の箱はサウルの時代に奪われた。

*フェニキアはシュメールに匹敵する古い地域だが、前述のヒッタイトと共に、“海の民” が侵入したことは注目である。＜日本の真相 6＞に記したように、フェニキアは“海の民” による侵入を受け、その時点から急速に発展している。ならば、この“海の民” は古代先進文化、シュメールの末裔と見なしても良いだろう。ならば、ヒッタイト側に侵入した“海の民” がフェニキアで合流した可能性もある。

特に注目すべきは、古いカナン暦では秋分の頃から 1 年を数え始めた、ということである。カナン暦では種まきを始める時期だが、神宮の神嘗祭は“神宮の正月” とも言われており、かつては 9 月に行われていた収穫を感謝する神事である。しばしば、ユダヤ暦との類似性が言われるが、ユダヤ暦はそれよりも古いカナン暦の影響を受けているに過ぎない。

また、カナンはエジプト人から“フル” と呼ばれ、それはシュメール語並びに日本語に共通する膠着語を話し、アルメニア地方（実はシュメール）が起源とされるフルリ人がチグリス川東方からカナン地方まで進出したことが起源である。このフルリ人の習慣は、聖書でも最も重要な人物の 1 人であるアブラハムの子の記述などに反映されているので、かなり重要な民族であることを伺わせる。

十支族はカナン地方に散らばったわけだが、後のガド族の大王が祖先に因んで“フル” を名乗ったとしても、それはこのようなことがあったからだ、と言うことができる。

ペリシテ人は“海の民” の一派とされ、水鳥や尾が魚の尾のような水鳥というのは主エンキを暗示しているから、シュメールの末裔と考えられる。

このように、この地域には多くの民族が集まり、中には明らかにシュメール系と思われる民族もある。そして、後に北イスラエル王国ショムロン（サマリ

ア) が建設されるが、1：(2)に記したように、それは“小さなシュメール”という意味である。これは、サマリアはシュメールの末裔が集まった場所に他ならないから、とも言えるだろう。

また、ゼカリア・シッチン氏に依ると、カナンの最高神はエルだった。これは個人神の名称でもあるが、“とても高い神”を意味する包括的用語でもあった。アブアダム（人の父）が彼の肩書であり、“情け深い、憐み深い”があだ名だった。とても高貴な神でアダムの父ならば、それは人類を創成し、大洪水から人類を救った“情け深い、憐み深い”「神」エンキに他ならない。これを裏付ける詩がカナンには残されている。「情け深い神の誕生」という詩である。

“エルが海岸にいと、2人の女性が彼のペニスの大きさにうっとりしてしまった。そうして、遊んでいた鳥が浜の上で日光浴をしている間に、エルはその2人の女性と交わり、二柱の神シャハル（夜明け）とシャレム（夕暮れ、または完成）が生まれた。しかし、彼らはエルの主要な息子たちではなかった。”

これは、＜神々の真相1＞に記した“アダパとティティの誕生”場面が原型となっていることは明白である。

“エンキは高官のイシムドと共に、川を巡幸して観察した。そこに、水浴びして戯れる2人の野生的で美しい女性を見つけた。エンキはキスしたい衝動に駆られ、イシムドに聞いた。「彼女たちにキスしても良いかね？」すると、イシムドが言った。「さあ、行って、キスしなさい！」イシムドは舟を寄せた。1人を呼ぶと、彼女は果実をエンキに差し出した。エンキは前かがみになって娘を抱きしめ、キスした。唇は甘く、胸は成熟して引き締まっていた。そして、彼女の子宮に精液を注いだ。エンキはもう1人も呼び、彼女がベリーを差し出すと、最初の娘と同じようにした。「この娘たちと留まり、妊娠するかどうか確認せよ！」とエンキはイシムドに命じた。日数が満ち、最初の娘がしゃがんで出産し、男児が誕生した。同じ日の夕暮れ、もう1人がしゃがんで出産し、女兒が誕生した。1日の夜明けと夕暮れに、その子たちは生まれた。イシムドはエンキに報告した。「誰がこのようなことを知っていたのか？アヌナキと地球人の間で妊娠が成し遂げられ、私は“文明化された人”に生を与えたのだ！」とエンキは有頂天になった。「この行いは、秘密にしておくのだ。母親たちに新生児を授乳させるのだ。その後、私の家族に加える。そして、パピルスの茂みの中で、葦の籠に入っている彼らを見つけた、と言うのだ」イシムドはその通りにした。エンキの妻ニンキはその子たちを気に入り、自分の子供として育てることとした。男の子をアダパ（捨て子、の意）、女の子をティティ（命を持つ者、の意）と名付けた。”

生まれた2人が息子となっているのか、息子と娘となっているのかの違いはあるが、いずれも“夜明け”と“夕暮れ”であり、生まれた2人は確かにエンキの主要な子ではない。エルの主要な息子はバールだが、バールや彼に関わるヤム、アナトの神話はいろいろな「神々」が場面場面で対応するが、それはマ

ルドゥクによって混乱させられた結果なので割愛する。

いずれにしろ、カナンに於ける元々の最高神はエンキだったのである。

③ユダ王国（北イスラエルと南ユダ連合）

有名なダビデ王に関わる物は何一つ発見されていない。旧約自体、後代の加筆や編集の跡が多く見られ、場合によっては一節毎に、いつの時代にどんな人たちが書いたのかを考えながら読む必要があり、さもなくば、話が重複したり矛盾したりして、理解できない。例えば、歴代誌にあるアダムからダビデに至る系図などは、ずっと後代に書かれたもので、すこぶる人為的なものである。

ダビデはサムエル記にも“ベツレヘム（パンの家、の意）の人の息子”としか書かれておらず、ユダ族出身、などという根拠は無い。サムエル記には、ペリシテの武将たちがダビデとその兵を“このイブリーたち”と呼んでいる。イブリーとは、元来“ロバによる隊商の長”という説があり、奴隷の場合もあり、傭兵の場合もあり、ハビルと大変類似している。彼らの特徴は、公道上の略奪は名誉ある武勇談であり、戦いの旗色を見て、都合の良い者に味方した。ダビデはペリシテに属しながら、南部の遊牧民族を襲って略奪を行い、私有財産を増やした。そして、その一部をユダ部族（南のユダ王国）の長老たちに贈り、友好関係を結んだ。

（北）イスラエルの諸部族は元々南部の諸部族（ユダ王国）と対立していたが、サウルの死後、ユダ部族はヘブロンにいたダビデを王とし、ダビデは南部ばかりではなく北部まで手中にした。そして、王都をヘブロンからシオンへ移動し、ダビデはユダの家の王とイスラエルの王とを兼ねることになった。

ダビデの特異性は即位にも現れている。サウルの即位は、神の人サムエルが神のお告げに基づいてサウルに油を注いで聖別した。しかし、その後のダビデの即位には聖職者は関わらず、ユダの人々もしくはイスラエルの長老たちが聖別した。その子のソロモンになると、ダビデ自らが即位を命じた。

また、ダビデは契約の箱をダビデの町に戻す際、エフォド（エポデ）を身に付けていたが、これは本来、神官が神のお告げを伺う時に用いた祭具であり、俗人が用いることは許されなかった。このように、ダビデは自ら神官の役目まで行い、宗教的権威まで手中にした。

忘れてならないのは、エルサレムの神殿も王宮も、すべてはフェニキアのデュロス（ヘブライ語ではツォル）の王の援助が無ければできなかった、ということである。

なお、ダビデと同様に、モーゼは旧約の中ではっきりとした人物像として描かれているが、歴史学的・考古学的証拠はほとんど無い。史料というものは、そこに“書かれてある時代”よりも、“書かれた時代”そのものを反映している。例えば過越の祭りの記事は、バビロニアから帰還した捕囚の民が記したものであり、おそらくバビロンの新年祭を思い起こし、それとモーゼのエジプト脱出に因んだ過越の祭りを結び付けたものである。

* 聖書信奉者には、かなりショッキングな内容である。ダビデが盗賊の首領で、

ユダ族とは何の関係も無いとは…。

旧約では、北イスラエル側が背教したことが原因で分裂し、崩壊するに至ったとされ、南ユダ側が正当化されている。すなわち、旧約は後の原始キリスト教に繋がる南ユダ側の人間がまとめたものと言えるだろうが、殿下が言われるように、“書かれた時代”そのものを反映しているから、一概には言えないかもしれない。

しかし、元々仲が悪かったので、ダビデというタガが外れると、即座に元通りに分裂したことは、辻褄が合う。そして、エルサレムの神殿や王宮は、フェニキア（カナン）の援助無しには建造できなかったことは、北イスラエルの方が文化的・芸術的に優れていたことを伺わせる。

また、ダビデがフェニキア（サマリア）の南にあるペリシテに属していたことは注目すべきで、ダビデがユダ族とは何の関係も無いことも合わせると、いわゆる“ダビデの星”とされる六芒星はユダ族のシンボルなどではなく、むしろ、北イスラエルの方に縁がある、と考えるべきだろう。その北イスラエルの地は、カナン＝フェニキアのサマリア＝小さなシュメールなのである。

④アッシリア

アッシリアは、メソポタミア（現在のイラク）北部を占める地域で、北部にはミタンニやヒッタイトが控えていた。

アッシリアに捕囚された（北）イスラエルの人々を、南部（南ユダ王国）の人たちはサマリア人と呼んで、異端者扱いするようになった。

アッシリアが北イスラエル王国を滅ぼした時、占領地政策として支配階級の移動を行った。アッシリア領の各地からサマリア地方にきた人たちは、土地と地位を与えられ、上流階層として相当の権力を有した。また、それぞれの故郷の宗教も認められたので、サマリア地方は民族的にも文化的にも異国化した。

アッシリアが滅んで新バビロニア王国となると、南ユダ王国は陥落し、ユダ地方はおそらくサマリア総督の支配下に置かれた。一般に、この時代以後、彼らは“ユダヤ人”という名称で呼ばれるようになった。

ユダヤ教が成立したのは、第二神殿建造の際、エズラがエルサレムで民衆の前で律法の書を読んだ時である。律法第一主義となったが、古い史料もあれば新しい史料もあり、そこに矛盾があり、更に口伝の掟や慣習もあるから、後のサドカイ派、パリサイ派などに繋がる分派行動が発生した。

*北イスラエルは滅んだわけではなく、支配階級はそのまま支配階級として継続したのである。そして、陥落した南ユダ王国もサマリア総督の支配下に置かれたことからすると、いわゆる“ユダヤ”の大王家は南ユダ王国のユダ族ではなく、サマリアの大王家、と言っても過言ではない。前述のように、ユダ族の王とされているダビデも、実際にはユダ族とは無縁で、むしろ北イスラエルとの関係が深いことも、それを裏付ける。

⑤ペルシャ帝国

(アケメネス) ペルシャ王国は BC559 年の建国である。ガウタマというマジギ(祭司)が王位を狙ったが、彼の宗教はメディア人が信奉していた自然崇拝で、地・水・火を神聖視した。(当時、祭司はいろいろな知識を身に付けており、一般の人々から見れば奇跡のようなことも行ったから、この“マジギ”が“マジック”の語源となっている。)

BC522 年にダリウス一世大王が、エラム王国の都だったスサを復興してそこに移った。スサはペルシャ帝国の冬の都だった。王はアフラマズダ神を信仰したが、それは古くからペルシャで崇拝されていた。これを改革したのがゾロアスターで、BC600 年頃とされている。ゾロアスター教は火を神聖視する。

*メディア人とは、現在のイラン北西部を中心に広がっていた民族で、インド・ヨーロッパ語族に属する北西イラン語系の言語を話した人々である。(Wikipedia 参照。) いつ頃、イラン高原に定着したのかは明らかではないが、イラン高原はイナンナの領地だったから、元々シュメールである。(ただし、イナンナはこの地域とインダスはおろそかにしており、言語もシュメールとは異なっていたことは、<神々の真相 1>に記した通りである。)

前述のように、カナン地域は小さなシュメールと言われるほど、シュメールの影響が大きい、やはり自然崇拝で共通性がある。それは、共にイナンナが主神で、豊穡神だからだろう。

アフラマズダ神の根源は古代イラン・インドの始源神ヴァルナだから、原型はイナンナである。イナンナはフェニキアでは火の鳥フェニックスとされたので、それがアフラマズダを経てゾロアスターとされたことは辻褄が合う。(おそらく、イナンナ=イシュタル=アシュタルテが変形して“アスター”なのだろう。)

ここで注目されるのが、エラム王国の都だったスサである。この地域は元々イナンナの領地で、イナンナ=スサノオだから、スサノオは“スサの王”から採った、とも考えられる。また<神々の真相 3>では、エラム人はシュメールの地に侵入して都市間の勢力争いに加わったが、そのスサの守護神はインシュウシナク(イナンナ=イシュタルを連想)と言い、後に冥界神となり、スサノオも根の国=冥界に下ったので、冥界神と見なすことができるから、スサは“エラムのスサ”由来であるとも考えられる、とした。そこで、エラムの歴史を振り返る。(Wikipedia 参照。)

原エラム時代は主に BC3200 年頃から BC2700 年頃までだが、既にスサなどの都市が形成されていた。

続く古エラム時代は BC2700 年頃のアワン王朝の成立から BC1600 年頃のエパルティ(スッカル・マフ)王朝の滅亡まで頃だが、シュメールのウル王朝との戦いの時代だった。

中エラム時代は BC1600 年頃のイゲ・ハルキ朝の成立から BC1100 年頃のイン第 2 王朝のネブカドネザル一世によるエラム侵攻までの時代で、バビロニア文化の影響を大きく受けた時代である。

新エラム時代は BC1100 年のネブカドネザル一世の侵攻から、BC539 年にアケ

メネス朝の支配下に入るまでの時代である。最後はアッシリア王アッシュールバニパルの攻撃を受けてスサを破壊され、アケメネス朝の支配下に入り、以後、エラム人による国家は成立しなかった。

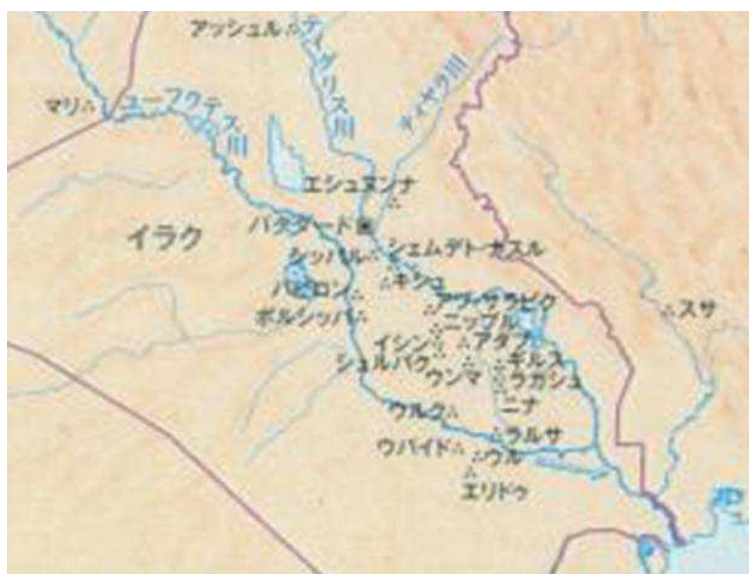
このように、エラムには注目するような史実は無く、＜神々の真相 1＞にも記したように、イナンナはこの地域にあまり関心が無かったから、隣国との戦いの歴史となっている。事実、小林登志子氏に依るシュメール王朝表には、エラム王国の都だったスサは入っておらず、スサノオという神名が“スサの王”由来だとしたら、特にスサという地域やその王がどうこう、ということではなく、単にイナンナが主神だった地域から採った、というに過ぎない。

・大洪水前

エリドゥ→バドティビラ→ララク→シッパル→シュルツパク。

・大洪水後

キシュ→ウルク→ウル→アワン→キシュ→ハマジ→ウルク→ウル→アダブ→マリ→キシュ→アクシャク→キシュ→ウルク→アッカド→ウルク→グティ→ウルク→ウル→イシン。



しかし、スサがペルシャ帝国の冬の都とされたことに着目すると、もう少し意味を持ってくる。それは、海部氏と和平を結んだ徐福並びに秦の始皇帝一団である。＜日本の真相 3＞に記したように、彼らはペルシャ系ユダヤ人とされる一団だった。それを暗示する、すなわち、古代ペルシャ帝国内の十支族を暗示させるために、古代ペルシャ帝国の都の名から採ったということは考えられる。

また、シュメールには周辺国からの貢物があったが、その中には猿や熊など、シュメールには存在しない動物があった。小林登志子氏に依ると、特に熊はイランのザグロス山脈方面から連れて来られたという。この地域は前述のエラムに属し、都はスサである。籠神社の極秘伝では、スサノオは熊野大神と同一と

され、＜日本の真相 5＞に記したように、“熊”は日神の前に跪いて日神を祀ることを暗示した。その日神は日前（ヒノクマ）大神だが、天懸（アマカカス）大神でもあり、“懸＝カカス”は“カカシ”に通じ、田を守る案山子に通じる。案山子は秦氏によるカッパーラではイエスを表し、案山子の“かか”とは古語で“明けの明星”を意味し、イナンナも象徴している。また、“クマ＝熊”も天を見上げるならば大熊座となるが、大熊座は北極星の周りを周回する御者であり、北極星は神宮の象徴“太一”だから、神宮を護る役目が“熊”である。

よって、徐福一団と海部氏の関係、日神を祀ること、神宮を守護する役目、そして、最高神がイナンナであることを暗示するために、熊がいてイナンナが主神だった地域の都スサから名前を採ったのがスサノオだと言える。つまり、海部氏とスサとの直接の関係は無くても良い。

⑥海部氏とは？

では、海部氏一族はどのような氏族なのだろうか。ここまでの考察をまとめると、次のようになる。

- ・最高神はイナンナで、柱の原型である。

- ・ヒッタイトとミタンニの観点からは、製鉄技術や八岐大蛇の逸話、太陽崇拝、太陽女神など、極めて深い関係が伺われたが、必ずしもヒッタイトからの渡来だとは言えず、王国崩壊後に直接渡来したとしたら、時代的に遡り過ぎである。

また、シュメールとヒッタイトを繋ぐ架け橋は、フルリ人（ミタンニ）であり、フルリはシュメールのコピーで、ヒッタイトは更にそのコピーである。

- ・カナン＝フェニキアの観点からは、神宮の暦が古いカナン暦に従っていること、カナンは言語的にシュメール語と日本語に共通する膠着語を話したフルリ人に因んでエジプト人から“フル”と呼ばれたこと、パレスチナという地名の基となったペリシテ人もシュメールの末裔と考えられる“海の民”の一派であること、そして、北イスラエル王国の都ショムロン＝サマリアは“小さなシュメール”という意味で、サマリアがシュメールの末裔が集まった場所に他ならないことからすると、極めて可能性が高い。ヒッタイトと同様に、シュメールの末裔と思われる“海の民”の侵入により急速に発展していることも注目である。また、元々の最高神はエンキだった。

- ・ユダ王国の観点からは、エルサレムの神殿や王宮はフェニキアの援助無しには建造できなかったこと、ダビデがフェニキアの南にあるペリシテに属していたことからすると、いわゆる“ダビデの星”とされる六芒星はユダ族のシンボルなどではなく、むしろ、北イスラエルの方に縁がある、と考えるべきである。

- ・アッシリアの観点からは、“ユダヤ”の大王家は南ユダ王国のユダ族ではなく、サマリアの大王家、と言っても過言ではない。

・ペルシャ帝国の観点からは、都だったスサが注目だが、徐福一団と海部氏の関係、日神を祀ること、神宮を守護する役目、そして、最高神がイナンナであることを暗示するために、熊がいてイナンナが主神だった地域の都スサから名前を採ったのがスサノオだと言えるので、海部氏とスサとの直接の関係は無くても良い。

以上のことから、海部氏はシュメールの末裔がそのまま、あるいは“海の民”として、あるいはヒッタイト等を経てカナン＝フェニキアに合流し、サマリアの大王家となった一族、と考えるのが最も妥当だろう。

海部氏の籠神社奥宮は、吉佐宮（よさのみや）とも呼ばれている。天（あめ）のヨサヅラ（瓢箪の褒め言葉）に真名井の御神水を入れてお供えされたという由緒に因んでいるのだが、対を成す伊雑宮がイザヤを連想させるので、こちらはヨシュアである。候補となるヨシュアは、ヘブライの民を約束の地に導いたヨシュアと、イエス・キリストのヘブライ語“ヨシュア・メシアッハ”である。八咫鳥に依ると、聖十字架の日本に於ける最初の到着地点はここということだが、海部氏は原始キリスト教徒ではなく、伊雑宮が旧約での預言者に由来するから、吉佐宮も旧約由来と見なす方が妥当である。そのヨシュアは、エフライム族のヌンの子である。すなわち、“吉佐宮”という名称も、海部氏がエフライム族であることを暗示するために付けられた名称と考えられる。

そして、神器の 1 つ、草薙神剣＝アロンの杖を同族の尾張氏が熱田神宮で祀っていることは、それを大王の印として持っていたサマリアの大王家、エフライム族であることを暗示していることは妥当であり、これまでの考察結果に一致する。

フェニキアは地中海沿岸部に次々と植民地を広げていったが、それは強い武器である鉄剣を持っていたからに他ならず、故に、エフライム族の大王も権力の象徴として鉄剣を持っていたと考えられる。そこに、八咫鳥は権威の象徴で大王の印であるアロンの杖を重ね、日本を封印するカッパーラの 1 つとしたのであろう。

そのアロンについて、興味深い記述を見つけた。アロンはイスラエル、特にヨセフの子孫エフライム族の中で、ポティ・フェラと同じような祭司の役割を担う家系となった、というものである。その根拠として、以下の点を挙げている。
(<http://www.geocities.jp/hiroku01/israelshi/exodus.html> 参照。)

・アロンは系図上モーゼの兄であるにも関わらず、そのことを示す表現があまり無い。物語部分で明言するのは、出エジプト記 4 : 14、申命記 32 : 50 だけである。

・レビ記 10 : 1 に、アロンの子ナダブとアビフが異火を主に献げたことにより、神に裁かれた話が載っているが、モーゼは他人のような言い方で語りかけている。また、民数記 20 : 28 でアロンがホル山の頂上で死ぬが、モーゼは兄弟の死に対しても、特別に悲しんでいる様子はない。よって、モーゼとアロンが兄弟

であることは、後から付加された。

- ・アロンの系図にはかなり作為の跡が見られる。アロンの父がアムラムであり、その父がケハト、その父がレビであることはどの系図を見ても同じだが、その他の部分では、アロンはレビ人と区別されている。例えば、民数記 3 章には“アロンにレビ人を与える”とあり、アロンの系図とレビの系図が別々に並べられ、アロンがレビの系図に入っていない。

- ・民数記 17 章で、モーゼは各部族ごとの杖を取り、レビ人の杖に“アロンの名を書き記しなさい”と命じている。つまり、このように言われるまでは、アロンがレビ人ではなかったことを意味している。

- ・アロンが他の部族出身者ならば、わざわざレビに繋がる系図を作る必要は無い。アロンが本来のイスラエルの支族ではないから、系図を作る必要が生じたのである。そこで重要なのは、ヨセフがエジプトのオンの祭司ポティ・フェラの娘アセナトと結婚していることである。(創世記 46:20) この人物の記録は特に無いが、名前が書き残されているということは、彼がかなり重要な立場に立っていたことを示している。

このような考察のもと、アロンはイスラエル、特にヨセフの子孫エフライム族の中で、ポティ・フェラと同じような祭司の役割を担う家系となったことから、エジプトのオンの祭司ポティ・フェラの子孫がアロンではないか、と推定している。

エジプトのオンは<神々の真相 1>に記したように、マルドゥクが自分より年長者たちを祀るために築いた聖なる都、ニビルの王に敬意を表したアンヌ（オン、ヘリオポリス）である。その中のプラトホームの上にエンキのための神殿住居を建て、自分の“空のはしけ船”の上部を置き、ベンベンとして祀らせた。これからすると、マルドゥクを祀らせるようにも思われるが、そうではなく、あくまでも自分より年長者、アヌとエンキを祀るために築いた聖なる都で、神殿としてはエンキの神殿だから、オンの祭司はエンキの祭司、ということであり、ベンベンは依り代的存在である。

確かに、ここに挙げられている点を考慮すると、聖書に記載されているアロンの血統は大いに疑問である。そして、この説が正しいとすれば、大王のみならず、祭司の正統もエフライム族の中にいたことになり、それは主エンキを祀る系統で、天香語山命が祭祀レビ、天村雲命がエフライム族の大王、と推察してきたことが、更に信憑性を帯びることになる。

⑦日本とシュメールの類似性

海部氏とシュメールの深い関係が明らかとなったわけだが、ここで、小林登志子氏に依るシュメールと日本の類似性について記す。

- ・シュメール語は万葉仮名のように、表意文字と表音文字の両方を使い分ける。

- ・シュメールの御神酒はビールで、ビールを嗜むことは文明人の証であった。
- ・ビールは甕からストローを使って飲み、杯はナツメヤシの酒を飲んだ。
- ・シュメールでは豚も飼育して食べていた。聖書では豚も脂身も禁止されているが、シュメールでは好んだようで、次のような詩が残されており、羊の方が豚よりも高級品だった。
 “脂身は美味しい 羊の脂身は美味しい 女奴隷には何を与えようかしら
 彼女には豚のハムを食べさせておけ”
- ・シュメール人は魚好きである。“私の愛人には魚の骨を取らせよう”と諺にあり、愛人は容認されていた。
- ・ハンコはシュメール発祥で、シュメールはハンコ社会だが、護符としても使われた。日本もハンコ社会で、実印は字の形や字画に凝り、下手な実印は不幸をもたらすとされている。

言語が膠着語で、表意文字と表音文字の両方を使い分けることは、まさにシュメール直系の証でもある。

日本人は、洋酒としてはワインやウイスキーなども嗜むのにも関わらず、何故か“取りあえずビール”で、肉も脂身が均一に広がってサシとなっている肉を好むが、これはシュメール人の血がそうさせるのである。

杯で飲んだのは「生命の樹」の象徴であるナツメヤシの酒である。故に、杯で飲む日本酒は「生命の水」である。

シュメール人は魚好きということで、四方が海に囲まれた日本列島に住みつけたのかもしれない。愛人については、つい先ごろまで、夜這いの風習が残されていた土地があるぐらいである。(藤原正彦著、名著講義(文春文庫)参照。)

このように、聖書とは無関係な、あるいは禁じられている事象が類似している点は、まさしく日本人はシュメールの直系の末裔、と言えるだろう。

ここで、日本に於ける神事で最も重要なことは、神を称えることでも神に仕えることでもなく、国家安泰を祈るのと同時に、五穀豊穡を祈願することである。シュメール語で豊穡は“ヘガル”と言い、元来の意味は“あるべし”である。これこそが、聖書に於ける“ありてある者”の根源に違いない。そして、豊穡神の根源はイナンナである。

(3) 六芒星

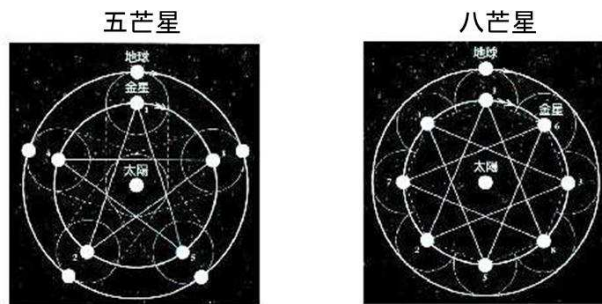
このように、日本人はシュメールの直系の末裔とも言え、海部氏はその流れを汲むサマリアの大王家、エフライム族の大王家である。そして、ユダ族の王とされるダビデは、実はユダ族とは何の関係も無かった。ならば、海部氏の籠神社奥宮の石碑にかつて刻まれていた六芒星ことダビデの星は、神宮参道の灯籠にも刻まれているが、一体何を意味するのか、ということになる。そこで、

これまでは単なるユダヤのシンボルと見なしてきた六芒星について再考する。

①五芒星

六芒星について考察する前に、五芒星について復習する。五芒星は知恵の象徴で、ダビデの星に対するソロモンの星、とされているが、真相は＜神々の真相 6＞に記した。それは、太陽、金星、地球の位置関係を暗示していた。地球と金星の会合周期から、地球の8年は金星の13年に相当し、会合周期を結んでいくと軌道上に五芒星が形成され、地球と金星の公転の位置関係を結んでいくと八芒星が形成されるのである。

このような図形としてのカッパーラを仕組んだのはピラミッドやストーンヘンジの建造者でマヤ文明の創始者である知恵の神ニンギシュジダであり、壮大な天体現象まで理解する知恵の象徴として五芒星が選択されたのである。また、金星はイナンナの象徴だが、イナンナが原型となっているイエスの象徴でもある。イエスは地球の救世主だから、その象徴の金星、地球、そしてイエスは人類（地球）に対する光でもあるから太陽で、これらの位置関係から描かれる五芒星が知恵の象徴となったわけである。



②宇宙空港シッパールの方向に向けての矢印

さて、六芒星であるが、＜神々の真相 1＞にウツが司令官となったシッパールの着陸地点の図を示した。これは、スサのBC3200年頃の地層で発掘された陶器に描かれており、三角形の領海と両側の山が、宇宙空港シッパールの方向に向けての矢印となっており、中心の十字は着陸地点を表す。確かに、この図形ならば六芒星になるし、十字もある。しかし、その意味合いは宇宙空港であり、海部氏は海から渡来したから、籠神社に存在する意味が無い。よって、この図形の可能性は無いと考えて良い。



③ある天体の象徴

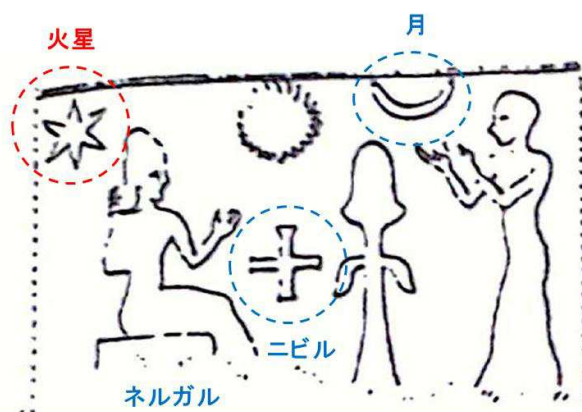
やはり、五芒星が天体に関する象徴ならば、六芒星もそのように考えるのが妥当である。太陽系創世神話に於いて、各惑星にはそれぞれ「神」あるいは人物が当てはめられている。

- ・太陽（アプス）：最初から存在したもの。
- ・水星（ムンム）：アプスの参事官で使節。
- ・金星（ラハム）：戦いの女性。イナンナ。
- ・火星（ラーム、ラフム）：戦争の神。ネルガルで、後にナブに変更。
- ・木星（キシヤル）：硬い土地の一番先の。
- ・土星（アンシャル）：天の一番先の。アンシャル。
- ・天王星（アヌ、アン）：天の彼。アヌ。
- ・海王星（ナディンムド、アンツ、エア）：技巧的な創造者。エンキ。
- ・冥王星（ガガ）：アンシャルの参事官で使節。

ニビル、すなわち、太陽系の最も外側の惑星から数えて地球は 7 番目に相当するから、7 は神聖数字となった。また、エンリルには王位継承数字の 50 以外に 7 も割り当てられるが、これは地球の総督となったからである。

金星は 8 番目に相当するので八芒星となるが、そこには前述のように、金星と地球、太陽の位置関係を暗示するカッパーラが重ねられている。

このように考えると、6 番目は火星となるので、六芒星は火星ではないのか、と思える。そこで、火星に相当する神あるいは人物を見ると、エンキの息子ネルガルもしくはマルドゥクの息子ナブである。＜神々の真相 1＞に記したように、後にナブに変更されたのはマルドゥクの策略なので、ここではネルガルを考えるべきである。実際、粘土板に描かれたネルガルには、ニビルと父エンキの象徴である三日月と共に六芒星が描かれている。



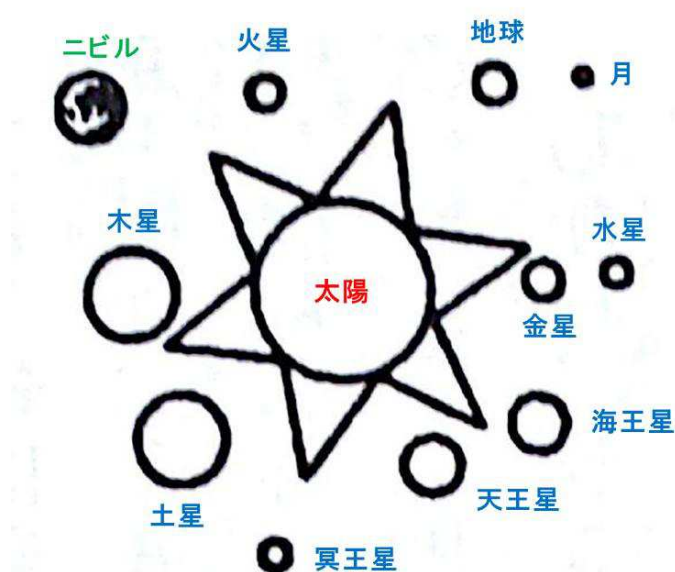
ネルガルはニヌルタと組んで、マルドゥクに対して核攻撃を仕掛けた戦いの神である。しかし、籠神社も神宮も戦いには直接関係は無い。また、粘土板に刻まれている六芒星も、かなり歪んだ六芒星である。

そこで、粘土板に刻まれた図をいろいろ調べてみると、これこそまさに六芒星というものがあつた。それは、太陽である！



これは、エンリルから人類への鋤の贈呈場面で、ある人物の手をニヌルタが引いている。この人物は、ニヌルタが自分の都市バド・ティビラで水路を掘ることや種蒔き、刈り取りなどを教えた“田畑で食べ物を育てる彼”、カ・インに違いない。そして、ニヌルタとカ・インの間に小さな星々を従えた六芒星が描かれている。これを拡大すると、次のように太陽系の各惑星が該当する。(ご丁寧に、月まで描かれている。) 火星には衛星が2つしかないので、これだけの星々は不要だし、農耕に関わる鋤を与えている場面だから、ここで最も重要な星は農耕を左右する太陽に他ならず、火星ではない。

太陽系拡大図



では、六芒星を太陽と見なすと、どうなのだろうか。太陽神・天照大神の元は籠神社の天照国照尊＝豊受大神＝天照大神で、豊受大神が豊穰神イナナ、天照大神が太陽神ウツならば、籠神社（奥宮）に太陽神ウツの象徴があってもおかしくない。

また、シュメールの流れを汲む海部氏＝エフライム族の大王家はサマリアの大王家で、サマリアを含むフェニキアの主神はイナナだが、ウツとイシュクルも次いで重要な「神々」だった。それ故、そこに持ち込まれたヒッタイトやミタンニ由来の製鉄技術や太陽崇拜、太陽女神の概念と矛盾せず、それが継続していてもおかしくない。

そして、内宮、外宮共に神宮の元伊勢は籠神社であり、籠神社の隠し紋としての六芒星が、神宮の参道に林立する灯籠に菊の御紋と共に刻まれている。ならば、これは“菊＝ロゼッタ”で象徴されるイナナ＝豊受大神＝外宮と、“六芒星”で象徴される太陽神ウツ＝天照大神＝内宮を暗示したものであり、日本に於ける根源神を神宮で祀っているということに他ならず、神宮参道に並び立っていることは、ある意味、必然でもある。



<http://ninja250ksr.blog.so-net.ne.jp/2011-11-06>

よって、六芒星は本来、ユダヤ民族の象徴などではなく、太陽神＝天照大神を暗示しているのであって、皇室がユダヤ民族である、という暗示は、後から秦氏が重ねたカッパラーである。

では、何故、“ダビデの星”と言われるのか？ダビデは都をシオンに遷した。シオンはエルサレム地方の歴史的地名で、そのエルサレムの司令官は<神々の真相 1>に記したように、太陽神ウツだった。古代に於いては、各都市には守護神がおり、戦争などはその都市の守護神によって成されるものだと考えられていた。よって、統一王国を造ったダビデ王の象徴として、新たなダビデの都シオンの守護神ウツの象徴が使われることは極めて妥当だから、六芒星が“ダビデの星”と言われるようになったと考えられる。

④かごめ歌

六芒星が太陽神の象徴だと判明した以上、＜日本の真相＞＜日本の真相 3＞＜日本の真相 5＞で解釈したかごめ歌を再解釈しなければならない。

＜かごめ歌＞

かごめ かごめ

籠の中の鳥は いついつ出やる

夜明けの晩に 鶴と亀がすべった

後ろの正面 だあれ

- ・＜日本の真相＞＜日本の真相 3＞：聖十字架的解釈。

奥義を守り抜いてきた日本の真実はいつ公開されるのか。その最たるものは、天照大神＝イエスの名が記された罪状板であり、聖十字架並びにユダヤの三種の神器がすべて日本に存在し、それを守り抜いてきたのが日本という国である。そして、物部氏（＝失われた十支族）の御神宝である草薙神剣が秦氏（失われていない二氏族）の最大にして最高の御神宝が封印されている伊雑宮の心御柱となって三種の神器がすべて伊勢神宮に揃った時、それが印となり、天照大神が降臨する。その時、誰もがその御姿を拝見することとなる。

- ・＜日本の真相 5＞：鶴（伊雑宮）、亀（籠神社）、心御柱の真意を含めて。

籠神社に封印されてきた日本の真相はいつ公開されるのか。公開され、世界に新たな光がもたらされる前、すなわち、新しい世界の夜明け前に、本来の神宮である伊雑宮に、本来の心御柱である草薙神剣＝アロンの杖が戻され、アロンの杖が伊雑宮の心御柱となり、本来の神宮が復活する。これは、息津鏡・辺津鏡とアロンの杖が揃い、太古の神祭りの原型が復活することを意味する。それが印となり、天照国照尊＝シュメールの「神々」が降臨し、誰もがその御姿を拝見することとなる。

今回の海部宮司との対談では、以下のことが判明した。

- ・最高神はイナンナである。

・伊雑宮の由緒にある真名鶴は重要で、日＝火の鳥フェニックスの暗示で、イナンナである。そのイナンナは豊穰の女神だから、稲穂を咥えていることは相応しい。すなわち、イナンナは豊穰神の豊受大神であり、イエスには豊穰の神という象徴は無い。

・豊受大神は水神でもあるが、イナンナはエンキが授けた「生命の水」で“復活”し、エンキも水神だから、豊受大神はイナンナだけではなく、エンキも重ねられている。

- ・イナンナが掛けられた木こそ「生命の樹」の根源で、それが伊雑宮のお田植

え祭りに於けるゴンバウチワとして象徴されている。

- ・天照大神が太陽神で陽、豊受大神が水神で陰ならば、天照大神は太陽神ウツ、豊受大神は豊穰の女神であるイナンナである。真名鶴が稲穂を咥えている様子は、両神の合一、陰陽の合一を象徴する。

- ・神宮の参道に林立する灯籠に刻まれている菊の御紋と六芒星は、それぞれイナンナ＝豊受大神＝外宮と、太陽神ウツ＝天照大神＝内宮を暗示したものであり、日本に於ける根源神を神宮で祀っているということに他ならない。

- ・これからは豊受大神の時代である。

以上のことを踏まえ、再解釈する。

- ・かごめ

籠目紋は籠神社と伊雑宮の御紋で、大元は籠神社である。

- ・鳥

籠に囚われた鳥は自由が利かず、封印された真相のこと。それは、豊受大神の真相であり、籠神社に封印された最高神イナンナのこと。また、籠目紋＝六芒星は太陽神ウツの象徴でもあり、海神ヤーも根源神とされているから、天御中主神＝天照大神＝豊受大神の真相のことで、日本神界の根源的三柱がエンキ、イナンナ、ウツであること。

- ・夜明けの晩

夜明けとは、世界に新たな光がもたらされること。すなわち、人々の悪意や憎悪に満ちた世界に「神々」が降臨することにより、人々の意識が変革して世界に新たな光がもたらされ、新時代の幕が開けること。その“晩”とは、「神々」が降臨する直前の段階。

- ・鶴と亀がすべった

真名鶴で象徴される伊雑宮はお田植え祭りで暗示される豊穰の神で、真名鶴は火の鳥＝フェニックスの暗示であり、イエスの根源でもあるイナンナを暗示する。そして、豊穰の神で“真名”ならば、それは豊受大神に他ならない。

籠神社では海神を祀るが、海神の大元はエンキである。エンキは亀としても象徴される。故に、亀は籠神社の象徴でもある。あるいは、伊雑宮をイナンナの暗示としたので、籠神社は太陽神ウツを暗示し、太陽神のシンボルは六芒星で籠神社奥宮の御紋であり、六芒星の周囲を結べば亀甲紋＝亀となるから、籠神社の象徴である。

そして、“その時”の前、すなわち、“夜明けの晩”には熱田神宮に安置されている太陽神の依り代で、真名井の水の象徴でもある草薙神剣＝アロンの杖が伊雑宮に戻され、伊雑宮の心御柱となる。籠神社には太陽神の分身である本物

の八咫鏡（息津鏡・辺津鏡）があるから、これにより表裏一体の籠神社と伊雑宮に最高神を祀る神器が揃う。これが“すべった＝統べった”であり、古代の神祭りの形態が復活して「神々」を迎える準備が整う。

- ・後ろの正面

後ろ向きのアダム・カドモン、すなわち、シュメールの「神々」。

よって、かごめ歌は次のように解釈される。

“籠神社に封印されてきた日本の真相はいつ公開されるのか。籠神社が封印する「神々」が降臨する直前、籠神社と表裏一体を成す本来の神宮、伊雑宮に、本来の心御柱である草薙神剣＝アロンの杖が戻されて伊雑宮の心御柱となり、本来の神宮が復活する。これは、本物の八咫鏡＝息津鏡・辺津鏡とアロンの杖が揃い、古代の神祭りの形態が復活して「神々」を迎える準備が整ったことを意味する。それが印となり、シュメールの「神々」が降臨し、誰もがその御姿を拝見して覚醒し、新たな時代の幕開けとなる。”

シュメールの「神々」と共に、おそらくイエスも降臨するのだろう。三笠宮殿下は、著書の中で次のように言われている。

“歴史は繰り返すのか？同じ歴史的イベントは二度と起こらないのか？両者を合わせると、歴史はらせん状に推移するように思える。この「らせん」を逆戻りすることにより、未来を探るヒントが得られるのではあるまいか？本書がそのヒントを提供できれば幸いである。”

これは、主エンキの御言葉と同じである。

“すべては「運命」だったのか、それとも、あれこれ決定したことによって形作られた「宿命」だったのか？天と地球が入れ子状の循環を規則正しく繰り返しているのなら、起こったことは、また発生するのだろうか？「過去」は「未来」なのか？地球人はアヌンナキを真似て、ニビルを追体験するのだろうか？最初にやって来た彼が、最後に去っていく彼となるのだろうか？

次から次へと思いが湧き上がる中、エンキは決断を下した。ニビルから始まり、地球での今日までのあらゆる出来事と決断を、記録に残すことを。「未来の世代への道標」となるように。後世の人々が、「運命によって指定された時」にこの記録を読み、「過去」を思い出し、「未来」を預言として理解してくれるように！「未来」が「過去」の審判者となるように！”

あたかも、殿下はこの御言葉を御存知だったかのようである。そして、今こそ、「運命によって指定された時」なのである。

参考著書：

- ・伴とし子著、「前ヤマトを創った大丹波王国—国宝「海部系図」が解く真実の古代史」、「応神と仁徳に隠された海人族の真相」、新人物往来社。
- ・小林登志子著、「シュメル—人類最古の文明」、中公新書。
- ・高坂和導著、「「竹内文書」超古代アメリカに行く」、徳間書店。
- ・前川和也編、「図説メソポタミア文明」、河出書房新社。
- ・大和岩雄著、「神々の考古学」、大和書房。
- ・三笠宮崇仁著、「文明のあけぼの」、集英社。
- ・岡田明子・小林登志子著、三笠宮崇仁監修、「古代メソポタミアの神々」、集英社。
- ・ゼカリア・シッチン著、「人類を創成した宇宙人」、徳間書店。
- ・ゼカリア・シッチン著、「神々との遭遇 上・下」、徳間書店。
- ・ゼカリア・シッチン著、「〈地球の主〉エンキの失われた聖書～惑星ニビルから飛来せし神々の記録」、徳間書店。
- ・藤原正彦著、「名著講義」、文春文庫。

初版：2012 年 6 月

改定：2012 年 8 月

改定 2 版：2013 年 1 月